
僕はオタクでない

三坂結城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕はオタクでない

【Nコード】

N8407W

【作者名】

三坂結城

【あらすじ】

主人公蓮見和磨の家族はオタクであった。父はA B48などのアイドルオタク。母はジャニーズオタク。姉はBLオタク。弟は女装趣味のコスプレオタク。しかし、唯一オタクでないのは和磨ただ一人。五人家族のうち四人がオタクで一人が非オタクの家族構成。そんな中で生活を送っている和磨はとにかくオタクが大嫌いであった。

ある日学校から帰宅した和磨は姉にBLゲームを買って来いと秋

葉原まで御使いに行かされる。そこで和磨はバレないように仕方なく変装をした。和磨はアニメイト、とらのあなと言った有名店では人目が多く行くことが出来ずに名が売れていない店へと入る。そこで和磨は姉が気に入るようなBLゲームを見つけレジに持っていくとする。が、そのゲームを自分と同じように変装した人も目に付けており取り合いになる。そして結果二人は取り合いで転倒する。

そこで目にした人は学校のマドンナ十朱仔那珂であった。そしてこの店では色々と話しづらいということとで穴場のメイド喫茶らぶメイへと赴く。適当な飲み物と食べ物を注文して仔那珂と話しているとウェイターのメイドが注文されたものを持ってきた。そのメイドさんはなんと同じく学校のマドンナ洞爺御月であった。驚きながらも三人で会話をして話を整理すると仔那珂がBL好き、御月がコスプレと幼女が好きという事実が判明する。

そんなハチャメチャな主人公。

果たしてこれからどうなるのか……………

俺とオタクと七月七日

「会いたかったぁー、会いたかったぁー、会いたかったぁー、イエス」

「はあ……………」

親父の部屋のドアを開けて溜息をつく俺。

俺は携帯電話を開ける。七月七日金曜日の六時五十分と表示された画面が表れる。

部屋に入ると塞ぎたくなるほどに大音量のA B 4 8の曲が流されている。周りの壁を見ると K B 4 8の生写真が貼られている。そして写真の他にもA BやS Eの曲やグッズの類が積み上げられている。

「爪切り、爪切りと……………」

人気急上昇中のアイドルの曲を気にせず爪切りを探す俺。俺の家には爪切りが一つしかないから困る。しかもそういう生活必需品は大体親父が所有している為、部屋まで取りに来なければいけない。

「はあ……………」

爪切りを見つけてドアを出ると俺はまた溜息をつく。そして俺は心の中で叫ぶ。

気持ち悪いんだよおおおおおお

！

別にA K を批判している訳では無い。人気だからこれからも頑張つて精進して貰いたいと思っている。俺が批判しているのは我が家の最高権力者。蓮見洋二のことだ。親父の職業は警察官。堅物として通っている。そして毎日犯罪を撲滅すべく必死に汗をかいて働いている。

しかし、我が家での親父は少なくとも型物では無い。はっちゃけてはっちゃけてはっちゃけている。家に帰ると直ぐにA B 4 8のPVを見て踊りを練習しているし……………まあ簡単に言うとアイドルオタクだ。

俺はオタクが嫌いだ。

その根源は親父やその他の人物から来ている。

「はあ……………」

既に三回溜息をついた俺は蓮見和磨。八月十三日生まれの神奈川に在住の高校二年生。見た感じよくいる主人公と同じく中肉中背。手短に言うなら凡人だ。エロい話にも時には乗るし空気だって多少は読む。最近の高校生はそれぐらいの輪に入る能力は身につけているものだ。特質した趣味は持っていないが小説も読むし好きなアーティストの曲だって聞く。普通でいるのって中々大事なことだと思う。

だが、

俺は完全な凡人では無いのかもしれない。

それは簡単な話、関わっている人間が凡人で無いからだ。例えば不良グループの中に凡人を一人入れるとその人まで不良扱いされる。それと同じ現象が俺にも起きている。

我が家の姉、蓮見奈々子は乙女ゲーム愛好者。そしてBLもいける口である。つまり乙女ゲームとBLの併発オタク。オタク用語では腐女子と言うらしい。

今は詳しく言わないが母と弟もオタク。さっきの例の通り表すとオタク達の中に入れられる凡人がこの俺。世間から見るとオタクと思われてしまう。

爪を切った後、俺は呟いた。

「学校行かないと……………」

俺は東京の高校に電車通学で通っている。神奈川から高校まで四十分程度だが俺は早めに登校する。一度ギリギリに電車に乗り、通勤ラッシュにより降りられずに遅刻したことがある為、俺は余裕を

持って登校している。

「行ってきます」

母親は弁当を作る人間では無いので家にあつた菓子パンとサンドウィッチを手にして俺は玄関を出た。

長い学校の授業が終わり、現在は昼休み。俺はいつものように悪友二人と机に弁当を置き、近くの椅子に腰かけ飯を食べる。机の位置は窓際の一番後ろ。涼しくて快適な場所である。

「それで、マキコちゃんの胸がGカップあつただけだよ……………」
一人はリアル充実（彼女無しだが友達多いという意）の男、街部真輔。エロいことが大好きで高校生と言う年を考えると健康体の人間である。そして今その男は女子がいるにも関わらず堂々とグラビア雑誌を広げていた。

「そしてその男がトイレで少女を待ち伏せておいて襲った訳。それが本当にえげつないんだよ。僕は思うけど………… あれは酷いね。本当に……………」

もう一人は中の上の顔立ちの末代司。真輔と同様エロが大好きな男。今一緒に食事をしている三人の中では一番顔が格好良いのだがモテない。その理由は簡単でエロいから。しかも好きなエロはレイプや強姦系。そして何故か俺と街部の名前を一部省略する男だ。

そしてそれを俺は適当に相槌を打ちながら飯を口に運ぶ。

「おい、聞いているのか？」

二人は顔を近づけて俺に言う。

「ああ、聞いているって。エロがなんたらだろ」

「省略するな！」

ああ、全く聞いてなかったよ。右から左に全て聞き流していました。

そんな俺の様子を見て街部が口にする。

「お前……もしかしてエロに興味無くなったのか？ いや……それは男として……お前、もしかして三次元で無く二次元に興味を持ち始めたのか？」

街部は引き気味で聞く。街部は三次元には興味があるが二次元には全くと言っていいほど興味を示さない。それどころか二次元を敬遠している人間だ。

実のことを言うと、俺はまだ皆に家族がオタクだということはバシていない。そして学校では俺はオタク嫌いと通っている。

「んな訳ないだろ。俺はオタクが大嫌いだ」

強気な姿勢で言うと街部は俺の肩をポンポン叩き笑う。

「ははは、分かっているって。お前はオタクじゃない。オタク達は気持ち悪い。お前もそう思っているんだろ？」

「当たり前だろ……」

俺はそう返事をしたが内心気持ちが渦を巻いていた。

自分では無く両親や兄弟が否定されているような気分の悪さ。その気分の悪さは油污れのように染み付いて取れなかった。

そんな会話をしている隙を見て、俺の菓子パンをちぎって口に入れる末代。そして末代は二人にしてはならない質問をした。

「和、菓子パン貰うね。そう言えば二人とも、彼女を作ったりしないの？」

「今はな……」「いらん！」

二人同時に口にする。

末代は街部の一言に溜息をつく。

「はあ、真の場合は欲しいけど作れないんだろ」

「知ってるなら聞くな！」

街部は末代の頬をつねる。

「痛い、痛い、痛い………それならどんな子がタイプなの二人とも？」

末代の質問が出た直後に答える街部。

「十朱と洞爺！」

「タイプを聞いたんだけど……………」

「だって二人ともクラスのマドンナ的存在だろ。まあ十朱の性格はマドンナと離れているけど顔は美人。それに胸もでかいし。洞爺は奇麗だけど皆近づけない。高嶺の花のような女だよな。あの二人と付き合えるなら俺は死んでも良い」

街部は手を握り締め「付き合いてえ」と漏らしていた。

周りを見ると街部が話していた洞爺御月が一人で弁当を食べていた。見た目は最高レベルの顔。髪は黒いロングで一本のくせ毛も無い綺麗な髪。彼女の右手には小説サイズの本がある。彼女のことだから芥川龍之介、夏目漱石、などの文豪の純文学を好むんだろうな。俺の家族とは無縁の人だ。

でも、

「寂しくないのかな、一人で……………」

俺は刹那に感じたことを呟く。

その問いに街部は素の顔のまま答えた。

「寂しい訳ないだろ。あの人はあの位置が一番合っているんだよ」

「そんなものなのかな……………」

確かに苛められている様子はない。それどころか皆からは近づけないほどに尊敬されている。でも……………俺にはそんな彼女が寂しそうに仕方なかった。

そんな会話をしている時、もう一人のマドンナがドアを強く開けて入る。

「キモイ、オタク！ 目障りだから消えて！」

ドアの前では、二次元のアニメについて盛り上がっているオタクグループが声を上げてていた。

『でも、でも』

「でもじゃないからさっさと道を開けなさいよ」

『は、はい……………』

オタクグループは机をドアから離れた所へ持って行き、小さい声

で再び話を続行した。

「全く、これだからオタクは嫌いなものよ」

彼女はオタクグループが道を開けたにも関わらず愚痴を零していた。

彼女の名前は十朱仔那珂。もう一人のマドンナとは対照で我儘なお嬢様のような性格である。髪の色は茶色、Bのローマ字が書かれたヘアピンを髪に付けている。鋭い性格ではあるが顔は本当に奇麗である。トップモデルにも引けを取らない顔である。

「あー、昼食の時間が短くなったじゃない」

彼女はパック型のジュースを手を持っている。どうやら下の階にある自販機コーナーでジュースを買っていたようだ。

そして彼女は開いている席へと腰を下ろす。そこには彼女の机に合わせて食べる友達もいる。十朱の友達は皆群を抜くほど奇麗な顔立ちをしている女の子だった。それでも一番奇麗なのは十朱であった。

「ほらな、奇麗だろ。十朱と洞爺」

「……………」

「僕は洞爺さんの方が好きだな」

街部の質問に答える末代。俺は無言。

「司、お前は馬鹿か。確かに洞爺は奇麗で高嶺の花だ。だが十朱も可愛い。俺は十朱の方が好きだ」

「でも性格がねえ……………」

「ふっふっ、性格は付き合ってから俺好みにすればよい」

「まず付き合えないだろ。真」

「うるせえ！」

末代と街部はいつもの調子で会話を進める。そんな中気分が乗らない俺は二人の会話に挟まれたまま口に菓子パンを運んでいた。

七月七日は既に熱い。記録的猛暑が年々伸びていく日本では当たり前前の光景になっている。こんな暑い日にイチゴジャムがふんだんに入っている菓子パンを口に入れる俺。例え窓際で涼しかろうが喉の

湯きは著しい。正直菓子パンを持って来るんじゃない。

しかし、他に食べ物が無い。だから俺は菓子パンを口に入れるしかない。

そんな気分最悪な状況で末代はもう一度聞く。

「で、結局、和はどんな子が好きなんだ？」

しばらく悩んだ後、俺は口にした。

「オタク以外の女の子全員」

学校が終わり玄関で携帯を開けると、午後五時二十分を表示していた。

「さて……………寝るか……………」

帰宅部の俺は、帰った後直ぐにベッドに直行しようとする。大半の帰宅部生徒は家に帰ったら寝るかゲームするか勉強のどれかであろう。最後の選択肢の勉強を選ぶ人間が数少ないのを俺は知っている。勿論俺はノー勉強だから直ぐにベッドへと飛び込もうと考える。しかし、俺の甘い時間は来なかった。

目が合った瞬間、俺は直立体勢のまま固まる。脇汗を掻き顔に縦線を入れる俺。

「……………」

無言で一ミリ、いや、一ナノも動けない俺。『ダルマさんが転んだ』の止まった状態である。別に家に熊が出たから驚いている訳では無い。誰が出たかと言われたら簡単に答えることが出来る。姉だ。姉が出たのだ。熊より恐ろしい姉が。

「和磨か、学校から帰って来たの？ 早いね。まだ朝だよ」

大学生一年生の姉はパジャマ姿で話しかけてくる。髪はぼさぼさで眼鏡をおでこに掛けている変人である。実際視力は高いはずなのにがキャラづくりとか何かでそこに掛けている。

でも……………そんな姉の紹介はどうだっていい。だから言わしてく

れ。今は午後五時二十分。朝でもなければ昼でもない。夕方に近い時間帯だ。

だが俺は訂正の言葉を入れずにそのまま立ち去ろうとしていた。しかし、姉が俺を見逃すわけがない。両肩を掴んで満面の笑みで俺に言った。

「和磨、乙女ゲームかBLゲーム買ってきて」

……………ほらな。熊より恐ろしい姉だよ。弟に乙女ゲームかBLゲームを買いに行かせようとするなんて……………ホント頭の螺子が取れているんじゃないのか？

「嫌だ」

「買ってきてよ、和磨」

「嫌だ」

「買ってきて」

「嫌だ」

「買え」

「嫌だ」

「バラすよ」

「買ってきます」

結局買うことになった俺。ちなみにバラすというのは姉がオタクのことである。我が家では別にオタクを隠さなくても良いと思っっているのが姉と母親。そして逆が俺と父親と弟。俺は家族にオタクがいると思われたくない。だから口止め料の代わりとして姉の欲しがつているゲームを秋葉原に買いに行くしか方法は無かった。

「あの……………買いに行くんですけど寝てからは……………」

「ダメ」

姉は目を擦りながら口にする。

「は〜い、分かりました」

姉に頭を下げて敬語口調になる。もう怖い……………。

親父、蓮見洋二はA B48とS E48のアイドルオタク。

姉、蓮見奈々子は乙女ゲームとBLゲーム好きのオタク（腐女子）

母親、蓮見真由子が関 ヤニ、アシ、SM Pなどのジャーニーズオタク。

弟、蓮見光河はコスプレオタク。

そして俺は玄関で叫んだ。

「こんな家に生まれるんじゃないよ！あああああああああああああああああああああ
あああああ

！」

俺こと蓮見和磨、今のところ非オタク。

そして非オタクの俺は変装して玄関を飛び出し、オタク達の聖域、秋葉原へと旅立った。

午後六時四十五分、現在俺は秋葉原駅の前に立っている。恰好は知人にバレないように普段着では無い。黒いサングラスに青のキャップ、そして極めつけにマスクを着用している。

「よしっ、いざ出陣」

俺は前屈みの姿勢で突き進む。速度的にはロウペース。しかし、油断してはならない。周りを見渡すと人ごみに囲まれている。コスプレイヤーはチラシ配りのメイドさんぐらいしか見当たらないがオタク達はたくさん歩いている。クラスにもオタクはたくさんいるのでバレないように歩かなくてはならない。

「よしっ………」 『とらのあな』に行くか！

進もうとした瞬間立ち止まる。そして入口近くで耳を澄ますと聞き覚えのある声が聞こえる。

『マジで！？』『ニヤミスちゃん』のねんどろいど、もう出たの？
買ってえ！』

『でも売り切れ、しかも再入荷はまだらしいから某達が入手するのはまだかと…………』

『嘘だろ！それはショッキングブルーだよ。全くイヤマジでマジで』

『再入荷を願うしかないでござるな』

『遅いつてえ〜』

『仕方ないでござるよ。しかし』

学校では有名なオタクのツートップ、桐原と前園の声が聞こえる。どうやら『とらのあな』まで買い物をしにきた模様。

「……………タイミングが悪いな……………」

変装をしてきているとはいえ、まじまじと見られると正体が分かってしまう。更に言えば、俺はクラスでオタク嫌いとして通っている。もしあの二人に見つかったら文字通り『死』あるのみである。

したがってここはスル が吉。

「ふう……………危なかった〜」

それにしてもあいつらの会話は俺には理解不能だ。

そして一息ついて俺は携帯電話を開く。時間は午後七時丁度。桐原と前園の姿が『とらのあな』から離れない為に俺は次の場所へと移動した。

「次はラジオ会館にする……………か」

『とらのあな』が無理でもただ照準を変えれば済む話！

そして俺は大急ぎで『ラジオ会館』へと移動する。

しかし、負の連鎖は繋いでいくものだ。

『マジやばす！ ミイナさんのグッズ来た！ 可愛い！』

『いやいやいや、夕月のグッズの方が完成度高いつて。だから夕月の方が可愛い』

『はあ？ 真琴様の方が断然可愛いって』
『ふざけるな！ ミイナさんの方が可愛いに決まっているだろ！』
『いや、夕月の方が可愛いねえ！』
『それなら真琴様の方が可愛い！』

『ミイナさんだ！』 『夕月だ！』 『真琴様だ！』

……………誰でもいいだろ。

俺は白い目且つ遠目でクラスメートの三人を見る。

『ラジオ会館』前にいる人間はオタク公言をしていない前田、生田、佐藤。まさかオタクだったとは……………でもまだ彼らは大丈夫だ。オタクを賛成していなければ否定もしていない。だが俺は否定している。見つかったらリンチされるんじゃないだろうか？

しかし、あれだな。アニメというのはたくさん名前があるんだな……………それにこんなにたくさんさんのアニメファン……………でも馬鹿には出来ないな。好きなものなんだから。どちらにせよ非オタクの俺は場違い極まりない。

しかし……………ここも駄目か……………。

「次は『アニメイト』に行くか」

「はあ……………」

結局萌系の有名店には入れなかった。アニメイトの後もゲームーズなどを回ったが結局知り合いやクラスメートが屯していた。

溜息をついても時間は戻らない。知り合いに会うのを覚悟で今から店に行くか……………それは無理だな。姉がオタクなのを隠す為に来ているのに俺の姿がバレたらそれこそ恥さらしだ。それだと何の為に来ているか分からなくなる。

今俺は名も知られていない適当な店を回って来ている。勿論警戒の目は緩めない。

「……………色々な物があるな……………」

引き気味で店内を見渡す俺。

店内は色々な種類の萌グッズが置かれている。アニメグッズ、コスプレ服、十八禁ゲーム、全年齢ギャルゲー、ホモゲー、他には痛車グッズなど多数ある。萌系の有名店に比べたら多少品数が劣るがそれでも凄かった。

携帯を開くと現在八時三十五分を表示している。残りの時間はこの薄汚れた店内で姉が欲しがってそうなゲームを見つけるか……………。姉が好きな乙女ゲームは体育教師を攻略するようなもの。それとBLゲームは筋肉ムキムキなおっさん同士が激しくホモ行為をしているゲーム。

「姉が好きなゲームって需要が無いから見つからないんだよな……………」

腐女子が好むBLゲームは華奢な体の男達が愛し合う物。でも俺の姉はそれが好きでは無いから探さないと見つからないんだよな……………。

姉の欲しいものが見つからず青息吐息の俺に、助け舟が出る。

『はいはいはいはい、当店自慢のワゴンゲームセールです。好きなゲームを持ち帰って下さい。年代物から新しいものまであります』
『『『『きや

！『『『

爽やかお兄さんがたくさんさんのゲームを積んだワゴンを押してくる。それと同時に押し寄せる腐女子の皆さん。腐女子の目の血走り具合に呆気にとられた俺。

その腐女子の輪に紛れ込む俺。そして姉の欲しがりそうな物を手当たりしだい探していく。

「爽やかボーイとダンディーマスター……………」

華奢な体つきの男の人と口髭を生やしているマスターが抱き合っ

ている。

「違うな……」

手に取ったそのゲームを積まれたゲームの一番下へと戻す。
近くにあったゲームを手に取る。

「花ざかりの男達……」

説明には主人公が男、男子校で同姓同士愛し合うゲーム……と書かれている。

「これも違う……」

そして俺は次々と姉が欲しがらない物を手に取っていく。

「若ダービーと若旦那のゲーム……」

勿論却下。

「女主人公が五十歳離れたお爺さんを攻略する乙女ゲーム」
年齢差ありすぎだろ！

「ジャニーズ風の男と弱々しい病人顔の男のBLゲー……」

これは色々と問題があるだろ…… 勿論却下。

そして…… 探すこと十分。ようやく姉の目当ての物を見つける俺。

「ムキシヨタ3？」

ムキシヨタ3という名のゲームを手に取る。それはムキムキマツ
チヨな男性と若くて小さな男の子が抱き合っている絵柄だった。

「…… 見るに堪えない絵だな…… でもまあこれならムキムキマツ
チヨがいるし姉も許してくれるだろう」

それを持ってレジに行こうとするがそのゲームが動かない。

「…… あれ？ 何で？」

ゲームを見ると逆方向から掴んでいる人発見。 現在俺とその人で
ゲームの綱引き状態である。

その人は俺と同じく変装をしているような服装だった。 マスクを
着用して茶色のサングラスをかけている。 更に夏だと言っのにニッ
ト帽を被っていた。

「あの、手を離してくれませんか？ これ持って帰らないと俺
世間から殺されかねないので」

最高の笑顔で口にするがマスクをしていたので相手には映らない。そして相手も同じような口調で返す。

「いやいやいや、あたしもこれは手放せないんですよ。だから今のうちに手を離してください」

「ははは、この人手を離すどころか力を強くしやがったよ。」

「いや、本当にお願ひしますよ。手を離してください」

相手が女だろうと力を強める俺。

「ははは、嫌です。っていうかあなた男ですよね？ だったらレディーファーストで譲って下さいよ。それに男の人がBLのゲームを買うのはどうかしていると思いますよ」

敬語口調の彼女は更に力を強める。

「あつはつは、そんな欧州方面のレディーファーストは日本で通じないよ。それにこのゲームは俺の為に買うものじゃないからね」

「だったら離して下さいよ」

「断る。命が惜しいんだよ、俺は」

二人は更に力を掛けて綱引き状態は続いていた。しかし、女の方は力の限界なのかいきなり力が抜けた。そして俺の引っ張る力により女の人は俺に覆いかぶさるような状態になった。

そしてその勢いにより二人とも、サングラス、帽子、マスク、が店内の絨毯に落ちる。

「イタタタタ………」

「あ、もう痛い」

思い切り打った腰を右手で押さえながら目を開ける俺。

そして、

俺は長い間の後、顔が目の前にある彼女の名前を呟いた。

「十朱？」

彼女も眼を覚まして俺の名前を小さく口にする。

「蓮見？」

二人はお互い目を逸らす。

七月七日七夕の日、彦星と織姫が出会うこの価値ある日に最悪な出会いをしてしまった。十朱仔那珂と俺、蓮見和磨。

「まずい」

目の前の女の子はクラスでも有名な十朱仔那珂。でもそれは俺の勘違いに違いない。だって彼女はクラスで一番、二番を誇るオタク嫌いの人だから。オタクの人が近づいた瞬間に距離を取って「キモッ!」「目障りなんだけど」と言った暴言を吐く女。

そんな彼女がここでBLEゲームを買いに来るはずがない!

勘違い、勘違い、勘違い、勘違い……そう思わしてくれ。頭の中で呪文のように復唱したが、どうしても勘違いに思えなかった。髪の色は茶色で同じ。顔も同じ。そして決定的な決め手はBと書かれているヘアピンを髪につけていること。

色々と整理をしたい。だけど最初にすべきことがある。

「ごめん、話の前にさ……起き上がってくれないか?」

「あ……ごめん」

あと少しで唇が重なる距離にあった彼女は起き上がる。起き上がった彼女の顔は赤くなっていた。そして俺も同じような表情をしていたのだろう。

「しばらく俺達は無言で突っ立ったまま顔を合わせずにいた。

「……あのさ……どこか人に見つからないような場所で話さないか?」

勇を鼓して話しかける俺。すると彼女は無言で頷き、手招きをした。どうやら秋葉原の秘密の隠れ家的な所を知っているようだ。

俺達はひとまず半額ずつ支払いゲームを買った。そして十朱にそれを一旦預けた。

「……………」
「……………」
無言で彼女の背中を追い続ける。名前も見えていない店を出て裏路地を突き進む俺達。

「……………」
きよろきよろと辺りを見渡す。さつきまで辺り囲んでいたオタクの姿は少なくなっている。そこではぼつぼつと数える程度のオタクが静かに歩いていった。

そして彼女の背中を追い続けると人が減っていく。そして歩きたびに俺は不安と緊張で大きくなった。

「……………」
こんな少ない道を抜けてどうするんだろっ？ ……………もしかして口止めどころか見つからない場所で葬られるんじゃないだろうか？ ああ、マイナスに考えたらいくらでも考えられる。

「……………」
いつも傲慢な態度の彼女は静かに指を差す。

「え？ ラブ メイ？」

目の前に見えるのはラブ メイと書かれた看板の店。

『お帰りなさいませ、ご主人様 』

玄関では中の上の顔のメイドさんがオタクの人を勧誘している。

つまりここはメイド喫茶と言っ訳だ。

「蓮見、入るよ」

「……………」
お断りだ」

「心配しなくてもいい。ここは知り合いなど一人もいない。メイド喫茶の穴場」

十朱は背中を向けたまま口にする。

しかし、そう言われても入る気が微塵もない俺。

「……………」
穴場？ メイド喫茶に穴場とか存在したのかよ……………。それに……………もしここに入ってしまったら自分がオタクであると言っているようなものじゃないか……………。

だから俺は自分の指針を変えない！

「入らん！」

「それじゃあこのゲームはあたしの物で良いよね」

「入ります」

弱っ！ 俺の意志弱っ！ もう本当に俺の意志は風前の灯と言っても過言じゃないからな。

意を決し、ドアを開ける。するとそこは地獄だった。

『『『お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様』』』

左と右に縦一列に並んだメイドさんが俺達に頭を下げる。

「……………」 「ただいま」

無言の俺と異なり、気軽に入る十朱。経験値の差がコミュニケーションの差を生んだ。いや、文化の違いが差を生んだのだ。

三次元と二次元の文化の違いで。

そして俺は額に汗をだらだらとかき、膝が震えている。そして心の中の脈がドクンドクンと速くなるのを感じた。

イヤイヤイヤイヤイヤイヤ無理無理無理無理無理無理無理無理無理

！ 絶対無理…………… 本当にごめんなさい。俺にこの環境は合わ

ない。

「はは…………… はは」

溜息を通り越し、不気味に笑いだす俺。

「落ち着いてよ。あたしだって秘密のコミュニティサイトで知って初めて来たんだからここ。ネットでは評判だったんだから」

「そうなのかよ？ お前初見なのにこんなに落ち着いてんのかよ…

…（つていうかネットで評判って穴場か？）」

メイドさんに席に案内されるまで俺はずっとこの調子だった。

店内は豪華でシックな作りになっている。そして普通のメイド喫茶なら客が多いのだろうがここは少なかった。穴場と言われるだけはある。

席に案内され腰を掛ける俺達。しかし、席に座った後もしばらく膝の震えは止まらなかった。別にお化けが現れた訳じゃない。ただ

受け入れがたいものへの極度な緊張から膝が震えていた。

「蓮見、ゲームの行方の前に何か頼む？　というか店に来たから頼まないで失礼」

「……………ああ、そうだな。メニューを貸してくれませんか」

『はい』

リボンが付いたメニューをメイドさんに受け取る。

萌萌オムライス1380円（メイドからの呪文あり）

萌キョンビームの手作り卵焼き680円（メイドからの呪文あり）

メイドみ焼き720円、萌萌カレー900円

メイドリンク340円、メイド水220円

カフェクッキー290円、超真聖あいす 320円

ラブコーヒー300円、ラブティー300円

萌きゅん……………、

メニューの途中でギブアップする俺。そして店員メイドさんに聞かれないように耳打ちする。

「十朱……………今すぐ出ないかこの店？」

「却下。さつさと決めなさいよ」

「うーん、何が何だか分からないんだが……………それに何でこんなに高いんだ？　メイドの手作り卵焼きなんて680円だぞ。それに何だよ、この呪文って？」

「メイドさんが呪文を掛けると料理が美味しくなるのよ」

「はあ？　何だ、それ？　最先端の科学技術か？　それとも人間が魔法を使えるようになったとでも言うのか？」

目を皿にして俺が聞くと彼女は溜息をつく。

「はあ……………それなら頼んでみたらいいじゃない。それを」

「これを……………でも高いから……………でも最新技術を見られるなら安いぐらいか……………」

そして非オタクの俺は、少し興味を持って頼もうとしたが躊躇す

る。

「あのさ……代わりにオーダーしてくれないか？ 流石に恥ずかしいんだけど……」

「無理。自分が食べたい物は自分でオーダーする。それが基本」

十朱は忠告した後、オーダーをする。

「超真聖あいすとラブティーを下さい」

「かしこまりました。お嬢様。ご主人様は何にしますか？」

「言わないといけないのか？ ああ、口に出したくないんだが……」

…。

「これとこれとこれ下さい」

『萌萌オムライスと萌キュンビームの卵焼きとラブコーヒーですね？ かしこまりました』

結局言えなかったチキン野郎の俺は、メニューを持ってメイドさんに注文した。

メイドさんはオーダーを取った後、厨房の暖簾を潜って行く。勿論その暖簾もアニメの絵が刺繍されていた。

「あんた意気地無しね」

「……………」

「まあいいわ。それよりも事情を整理しましょう」

「ああ、そうだな」

まずはオタクを毛嫌いしている彼女が何故あそこにいたかを問いたい。

「で、お前は何であそこにいたんだ？ 誰かに頼まれたのか？」

滅茶苦茶オタクを嫌っている十朱のことだから誰かに頼まれたんだろうな。

しかし、俺の予想の言葉は耳に入ることが無かった。

「違う。あたしが好きなゲームを買いに来た」

「……………は？」

違う、違う、違う、ノンノンノン、違うだろ。

「といってもBLゲーム以外にも小説や他にもたくさんあるわよ。」

拓也君とかアキラ君の水毛行為も最高だし………うつとりするのよね」

十朱は目を細めてうつとりとする。

「へえ………そうなんだあ………」

ドン引きの俺は椅子を少し下げて返事をする。

「それなら何で………オタクを隠しているところかオタクの人を汚いような眼で見ているんだよ？」

何気ない質問をすると先程まで笑顔だった彼女は俯く。

「無理だったの………女子高生ってオタク嫌いが多いんだ。あたしはそれが怖かったの。本当は好きで、好きで、堪らない。学校に行かずにずっと家でプレイしたいとも思っているわ。でも………それを皆に告げても遠ざかれるだけ。オタクって気付かれなくなったらあたしはあんな行動を取ったの」

俯いて震えている彼女を見ると、いつも見る十朱仔那珂の姿にはとても見えなかった。まるで背中を丸めている子ども。そんな弱さを感じる。

「……………」

無言で俯いた彼女を見る。

俺も俯き言葉が出なかった。返事の為の一ピースも俺の頭では何一つ生まれない。それだけ俺は格好悪かった。

そんなどんよりとした空気の中、メイドさんが注文された食事を持ってくる。正直間が欲しかった俺には助かった。

「萌萌オムライスをお持ちしました。ご主人様　私のご主人様の為に呪文を掛けてあげます」

料理を持ってきたメイドさんは先程のメイドと声が違う。どうやらさっきのメイドさんと違う人が持ってきたようだ。それにしても………この声聞いたことがあるような………。

恐る恐る顔を上げる二人。そしてそのメイドさんを見た瞬間三人同時に声が出た。

「あ……………」
「え……………」
「お……………」

大きく口を開ける三人。

メイドさんは持つている皿をカタカタ震わせながらテーブルに置く。そのメイドさんは洞爺御月に似ていた。というより本人だった。もう間違いない。カツラを被って金髪ではいるが分かる。彼女だ。洞爺御月だと。あの読書好きで静かな高嶺の花の彼女。

彼女もまた七月七日という価値ある日に運悪く出会ってしまった。

「洞爺……？」「洞爺さん……？」

そんな彼女が今メイドさんとして働いている。フリフリのメイド服を着て。

「……………何のことでしょうか？ 蓮見君？ 十朱さん」

「そこはご主人様とお嬢様だろ……」

「あっ……」

彼女はしまったといった表情をして口に手を当てる。

うん。間違いない。洞爺御月だ。

「洞爺……ここで何しているの？」

「え……………あの……………ごゆっくり」

彼女が慌てて厨房に逃げようとしたので腕を掴む。

「お触り禁止です」

「分かった。もう触らない。せめて呪文を唱えて言ってくれ。でないと高いお金を出した意味がなくなる」

「え……………」

彼女は泣きそうな顔をしていたが表情を変えて呪文を唱える。

「萌萌キユン 私の愛よ、オムライスに宿れ！」

両手でハートを作り、胸の前から俺達に突き出してくる。

「……………」

これが呪文？ それにクールな洞爺がキャラチェンジ？

無言で俺は洞爺を見る。そして洞爺は目を逸らしたので十朱に視線を変える俺。すると十朱は口を抑えて笑った。

「くっふふふ……………ごめん、耐えられない……………ぷっ……………まさか

洞爺さんがオタクとはね。しかもさっきまでのムードが台無しだし

……ははは」

「十朱……」

「はははっ、蓮見、オタクって意外と身近にいるね」

十朱は笑い泣きしている。それだけ笑いの壺に入ったのだろう。そして俺も笑いながら返事する。

「そうだな。まさか洞爺がオタクとは……予想外だった」

「ううう……それじゃあ、ごゆっくり」

「待てよ」

もう一度腕を掴む俺。

「だからお触り禁止！」

「ああ、分かった。だから直ぐに去ろうとするな」

「でも仕事だし……」

洞爺が戻ろうとすると、十朱が笑顔で止めを刺した。

「戻ったらオタクって皆に言うよ」

「……その脅し私も言えるよね？」

ふう、と溜息をして洞爺は近くの席から椅子を持ってきた。

「分かった。でも仕事だから手短にお願い。それと注文は持つてこないといけないから全部持つてくるね」

覚悟を決めたのか真剣な顔で洞爺は口にした。そして注文の卵焼きでまた呪文を唱えて貰い、彼女の顔は恥ずかしさで赤く火照っていた。

「洞爺さんは何で、メイド喫茶で働いているの？」

「趣味と仕事を両立出来るから。それとここ知り合い来ないから。

今日来たけど……」

彼女は正直に答える。

しかし、変な光景だな。変装に近い姿の二人とメイドさんが席に座っている光景は。

「でもビックリだな。洞爺がオタクってこと」

そう口にすると洞爺は俯いて口にする。

「趣味はコスプレ。でもクラスの皆には言えなかった。皆勝手に私

は静かで大人しい性格って決めつけていて誰にも言えなかった。本当は開放的にオタクと公言しても良かったんだけどね。でもそれも出来なかった」

「ご、ごめん……つい」

自分の軽拳な発言に拳を握る俺。……馬鹿だ、俺は……空気が読めていない。

「別に良いって。誰でもそう思うだろうし。一人でいつも本読んでいて皆には高貴な存在って言われるけど全然嬉しくない。だって言いかえれば根暗で友達がない子。今の位置だって自分が仮面を被っているから立てているしね」

メイド服の彼女は自虐して笑っていた。

「洞爺……」

俺は慰めの言葉一つ掛けられず上を向いた。一瞬で明るいう困気
のメイド喫茶が氷点下まで凍りついた気さえした。

そして更に洞爺と十朱が俺に聞く。

「ねえ、蓮見君……私自分がオタクってこと打ち明けた方が良いのかな？」

「あたしもそう思った。今まで理不尽にオタクの人を罵倒しておいて自分だけ逃げるなんて酷いよね……あたしも言った方が良いのかな？」

二人の顔をそれぞれ見る。そして俺は微笑み親指を立てる。

「言う必要はないだろ。女の秘密は特権だ。可愛い女は秘密が多いってテレビで見た。一つだけ言うておく。俺はお前らを否定しない」

本当に下らない答えと今では後悔している。普通は親身に相談に乗って、言うか言わないかを本人に決めさせるもの。だが俺は正直に答えた。

俺はオタクが嫌いだ。これは不変、変わらない。でも二人の趣味ならそれは仕方ない。それをつき通して欲しい。もしも打ち明けて

しまつたら、多分今まで通り楽しくアニメを見ることやライトノベルを見ることは出来ないだろう。だから黙っていてほしい。自分の好きなもので二人に悲しんで欲しくない。

そんなふざけた回答をした俺へのお返しは、暴力でもなければ罵声でも無かった。返って来たのは純粹な笑い。

「はっはははは、くふふふ」

「あははは、ははは、ははは」

二人は口を押さえるが笑いが止まらない。

「あんた本当に馬鹿だね。ははは、何が女の秘密は特権だ、よ」

「あはははは、それにあの言葉テレビを参考にしたの？ ははっ、自分の言葉にすらなっていない」

大笑いする二人は「でも」と後に付け加え続けた。

「「ありがとう」」

「え？ ああ……………」

怒ると思っていた二人からのお礼は、俺にとっては理解し難い言葉だった。

本当に良かったのかな？ あれで。

「っていうかさ…………十朱と洞爺じゃ名字の呼び方が似ているから名前前で呼んでよ」

「ああそれ私も思いました」

二人はお互い頷く。とあけ……………とうや……………確かに似ているな。

「分かった。それじゃあ……………御月……………仔那珂……………これで良いか？」

照れて顔を赤くして言う俺。いつも男子としか会話をしない俺はこういうのに慣れていないんだ。しかも彼女いない歴〃年齢。だから女の子にどう接したら良いかも分からない。手を握ったのだからフォークダンスの時だけである。

「あっ……………うん。それでいいよ、蓮見」

「ああ、はい。それで構いません蓮見君」

二人は何故か俺に顔を合わせないように俯いた。

「でもさ、俺だけ名前呼んで二人は蓮見って呼ぶのも……俺のことも名前で呼んでくれ。別に強制はしないけどさ……」

照れ隠しに頭をかく俺。

すると二人はゆっくりと顔を上げて口にする。

「……………和磨」

「……………和磨君」

名前を呼んだ後、彼女達はトマトのように顔を赤くする。

「仔那珂さん……………」

「御月……………」

その後、仔那珂と御月は名前の呼び合いをしていた。

「……………（ああ、名前で呼び合うのも良いな）」

雰囲気も解れたので俺は本題に戻る。

「で、どうするんだ。あのゲーム？」

「ああ、あれのこと？」

ガサガサとバッグから例のBLゲームを取り出しテーブルに置く

仔那珂。

「ひっ……………」

御月はBLに耐性が無いらしく引いた。

「御月、引き過ぎ……………」

「ああ、ごめん、私オタクだけどBLとかには興味がないの。ごめんね」

「そうなの……………好きだったらおススメのBLゲーム紹介してあげたのに」

しょんぼりする仔那珂。どうやらBL友達が見つかったと思っていたらしい。その後に聞き捨てならないことを口にする。

「まあいいか。和磨がいるし」

「ひっ……………キモッ」

御月は俺を見て仔那珂の時の五倍は慄いていた。

「はははっ、いやっ、別に……そう言う訳じゃ」

「うん、別に良いんじゃないか。あはは」

初めて話したと言っても過言でない俺と御月は、以心伝心で誤魔化した。

「やっぱりシヨタ好きは最高よね！ それにこのヘアピンのBもボーイズラブのBだからね。似合うでしょ」

「へえ……似合うな」

「……仔那珂さん……」

彼女は間違った方向にシフトする。そして何か俺達までシヨタ好きのカテゴリに入れられているし……。

これ以上墓穴を掘らない為、違う話をして話をはぐらかす。

「御月いつも本を読んでいるよな？ あれって宮沢賢治とか芥川龍之介？」

「そう言えばいつも読んでいるわよね。あたしも気になってた」

よしっ、話を変えることが出来た！ 最高の答えは芥川龍之介の羅生門などと答えること。でも多分それは今までの話から違う。ライトノベルのはずだ。確かにあまり触れたくないけどシヨタ話をするよかマシだ。

「違うよ。小梅マチさんのマイマツリ。他の作品も読むけど芥川さんの話は読まないよ」

「マイマツリ？ どんな話なの？」

見えないところでほくそ笑み、俺はぐっと拳を握る。

やった！ やった！ シヨタから話を完全に逸らすことが出来た。しかも読んでいる話はマイマツリ。名前からしてライトノベルじゃないような気がする。俺の予想では純愛ストーリー。そんな気がする。名前からして！

しかし、俺のほくそ笑んだ顔が大きく歪んでしまう。

「マイマツリは小さい女の子達が妹祭という祭りで主人公とエッチい行為に及ぶ話だよ。でも私は一番コスプレシーンが好きだな。たくさんの小さい女の子達が肌を露出している服を着て観客を喜ばす

ど……………こつそりすれば大丈夫かな？ それに記念だしね」

彼女は眩しい笑顔で俺の携帯に近づける。そして家族以外で初めての女の子のアドレスが、俺の電話帳に登録された。

でも何かの記念って……………オタク記念？

「あたしも」

仔那珂も携帯をバッグから取り出して俺の携帯に近づける。彼女の携帯は水色で白の小さい点が散らばっているもの。御月同様可愛い携帯である。俺の真白で他の色が一切ないシンプルイズベストホワイト携帯よりは幾分マシである。

今日で二人の女の子のアドレスをゲットした俺。しかもクラスでは一番と二番を争うモテぶりの女の子。もし男子に知られたらその日の内に海に沈められるだろうな。

「ってこんなことをしている場合じゃないわよ、和磨！ 結局何度このゲームの話をすればいいの？」

仔那珂はそう口にしてテーブルに置いたゲームを指差した。

「ああ、そうだよな……………うん、ここは平等にじゃんけん？

指スマ？ 大富豪……………ランプが無いか……………」

「譲ってくれそうにはないわね」

「当たり前だ。このゲームがどんなものか分からないがマッチョのおっさんの絵があるなら買ってこないといけないんだよ。そうしないと俺は……………」

「飢えてしまうの？」

「んな訳ねえだろ！」

何で俺がムキムキマッチョのおっさんを恋しくなっているんだよ！

「冗談よ。でもあんたさっきそのゲーム知らないって言ったわよね？」

「ああ、初めて見たこのムキシヨタ3だっけ？」

「そう、ムキシヨタ3」

仔那珂は誇らしく答える。

ん？ さっきやたらと3を強調して言ったような？

「あんた勘違いしているようだけどこれはムキシヨタ1、ムキシヨタ2と出てきて三番目のゲームのムキシヨタ3なの。だから1と2をしていないとつまらないわよ」

「え？ ムキシヨタ3……………ああ……………そういうことか……………」

つまりあれだ。俺は漫画で言うところの「一巻買わずに三巻を購入したようになってるんだ。だとしたらつまらないだろうな。腹を括り俺はそのゲームを手に取り仔那珂に渡した。

「やるよ、これ」

「え？ いいの？」

「さつき言っていただろ。一と二をしていないとつまらないって。だから俺はムキシヨタの「一と二を探してこれの代わりにそれを買うよ」

「ありがとう和磨あ」

渡されたゲームを彼女は胸の中で抱きしめて歓喜する。あのゲームが俺だったらと思うってしまうのは健康な男子だからかもしれない。彼女は喜んだ後、言葉を続けた。

「でも残念ね。ムキシヨタは完全予約生産版。だから予約をしていないと滅多なことがない限り店頭に見れないの。だから多分もう……………探しても時間が掛かるわよ。パソコンで探してもプレミア価格が付いて高いだろうしね」

「マジかよ……………」

ああ、姉にオタクを暴露される。そして俺の家族がオタクと言う事実があつと言う間に流れて、俺は世間から弾き飛ばされる。

頭を抱え込み、顎をテーブルに付ける俺。すると仔那珂が何かを手渡してくる。

「ムキシヨタ1？ ムキシヨタ2？ これどうしたんだ？」

「たまたま持つてきてたの。ムキシヨタは1と2は予約出来たんだけど3は予約に間に合わなかった。そこで適当にふら付いていたら見つけた訳。でも和磨も同時にムキシヨタ3に手を出した訳でしょ。だから貸してあげるわよ。このムキシヨタ」

彼女は照れながらムキムキのおっさんと小さい男の子が抱き合っているゲームを手渡してくる。

俺はそれを喜んで受け取る。

「ありがとう、本当にありがとう」

「良かったですね……………和磨君」

御月は少し引きながら微笑みかける。苦笑いに似た表情だった。でも助かった。これで世間から消えなくて済む。

「本当にありがとうな。仔那珂」

シヨタBLの彼女が今は天使に見える。これで俺の明日もどうにか繋げそうだな。

しかし、仔那珂は俺を違う目線で見ていた。

「何てことないって。お互い様でしょう。BLのお宝探しをしているのは。同じBLオタク同士助け合いましょう」

は？

「あの何か勘違いしているかもしれないけどさ……………俺BLじゃないよ」

「え？ だってあんたコレ……………」

ムキシヨタ3を持って仔那珂は眼で何かを訴える。

「和磨君BLオタクじゃ無かったの？」

逆に少し嬉しそうな御月。

「だって仔那珂に会った時言ったじゃねえか。俺の為に買うものじゃないって」

「あれは照れ隠しと思ったのよ」

「何そのキモイ照れ隠し！」

何で男の俺がムキムキマッチョと小さい男の子のゲームを買う為に、照れ隠ししないといけないんだよ。

「じゃああんた何オタクなのよ？」

「俺は非オタク。つまりオタクじゃない」

彼女達は手を小さくポンと叩き頷く。

「へえ、あんたオタクじゃなかったのね……………」

俺とオタクと七月七日（後書き）

稚拙な文章ですがどうか温かい目をお願いします

俺とオタクと水着少女

「熱い、熱い、熱い、熱い、熱い……………」

七月二十日、俺は机に突っ伏せて苛立ちを復唱する。

「別に良いだろ。だって今日で学校最後だし」

「明日から夏休み。それに今日は終業式の約三時間で下校出来る」
机に突っ伏せた俺の目の前に現れる悪友二人。街部と末代。

「うるさい……………夏の暑さの八割はお前らだろうが。六割が街部で二割が末代」

「んなつ……………和磨、お前暑さを俺のせいにする気か！ しかも何で俺が六割!?!」

「特にうるさいから……………」

「理不尽!」

街部はその後もなんたらこうたら口にしていた。睡魔と熱気に支配されている俺は更にこいつの騒音までストレスの原因となる。

「ああ……………それにしてもこの熱さは異常だろ」

地球温暖化により暑さが上昇している地球。冬にこの暑さの余分な分を持って行ったらいいのにと思う自分がそこにいた。更にストレスの原因は、学校にクーラーが設備されていないこと。

団扇で俺を煽ぎ始める街部。

「確かに熱いよな……………」

「僕もそう思う。こんな日はプールでも入りたいよね」

末代の言葉を聞き街部は目を光らせる。

「それ良い！ 今度三人で近くのプールに泳ぎに行こうぜ!」

「うん、良いね、真！ 僕も賛成！ 和も来るだろ?」

プールか……………それも良い、と一年前の俺なら首を何度も振ることだが今回は違う。

「悪い。俺バイトあるんだ」

「えええ……………マジかよ……………どうする司?」

「うん……和が来ないとなると……」

二人は思案顔になってどうするか相談をしていた。そんな二人に俺は心の中で謝る。悪い、バイトは嘘だ。実際は先約があるんだと。その先約が終わるまではいつ何時プールに行くことは許されない。

「まあ良いや。暇が出来たら連絡くれよ。和磨」

「うん、遊べなくてもメールは送ってくれよ、和」

そんな二人に俺はいつもの口調で言った。

「覚えていたらな」

終業式が終わり俺は一人で下校中。

ふっふふと鼻歌混じりに下校する。

携帯のメール受信を開けるとそこには俺のパラダイスがあった。

『From 洞爺御月』

Subject プールに行きませんか？

メールとか男子にしたことが無いから間違っていたらごめんね。

(女子にもあまりしたことない(笑))

実は私のバイト先でプールの無料券が余ったらしいんだけど良かったら一緒に行かない？ 仔那珂さんも招待しているので良かったらメール下さい。

もし良ければ日を追ってメールするね』

「ふっふふ……」

勿論メールが来た二十秒後に『行きます』と敬語で送った俺。

「あはははは、はははは、はは」

スキップしながら帰る俺。喜んでいる訳ではないぞ。これ、しかし。

前二人とメールアドレスを交換してから俺は頻繁に彼女達とメールをしている。二人と秋葉原で出会ってそのままでは無いのだ………ちなみに姉にはムキシヨタでどうにか誤魔化せた。と言ってもム

キシヨタ1しか渡していない。次に買つて来いと言われた時に渡せる予備を置いて置く為に。

このメールが来たのは四日前『行きます』と送ったメールの返信はその二日後。プールに行く日は八月一日と決まった。なら何故その日の前に街部、未代とプールに行かないかという簡単な言葉でお答えできる。

女子とプールに行った輝きが薄くなるからだ。

もしも同じプールに行ってしまったら「ああ、ここ前と同じだ」とつまらなくなってしまう。だから最初は女子達と泳ぎたかったという訳だ。

しかしあれだな。オタク女子が嫌いと言っておきながら、プールに誘われたら断れない自分がここにいる。

「ああ、早くプールに行きたい！」

それどころか上機嫌な俺は、早く時が過ぎると心の底から思った。男なんてそんな単純なものだ。

「ああ、八月一日よ、早く来い！」

家に帰ると相変わらずの惨状だった。

家に入った瞬間アイドルの曲が俺の耳に入る。これが朝から晩まで続くので本当に鬱陶しい。

靴を脱いで直ぐの所で兄弟に声をかけられる。

「あ、兄ちゃんおかえり」

「お……………おっ」

目の前にいるのは赤と黒のストライプのスカートを穿き、白いロングの鬘を被っている。そしてキャミソールを着ている女の子…………

…………では無く男の子の蓮見光河。現在小学四年生である。

「兄ちゃん、この服似合っているかな？」

「あ……………ああ」

凄く似合っている。実際には似合ってはいけないんだがな。性別

的に。

光河は化粧無しで女の子のような顔をしている。だからまさに女の子の姿だった。声は高く華奢な体つきなので元々女装の素質がある訳だ。

だがそれがどした？ 男なのだ、彼女は……いや、彼は。

「兄ちゃん、次はどんな服を着て欲しい？」

ゴスロリか……純白のワンピース……それがミニスカート……

「止める。忠告するがお前は弟。決して妹では無い」

いかん、いかん、自分の理性が吹っ飛びそうだった。

「むっ……兄ちゃん……」

光河はアヒル口にする。可愛い……では無い！ 何を考えているんだ、俺は！ この場合はロリコンになるのか？ 男だからシヨ

タコン？ でも……女装趣味の男ならロシヨコン？

「っっていうか兄ちゃん最近浮かれてるよね？ どうしたの？」

「何を言っている光河！ 俺は一%、いや、百分の一%も浮かれてなどいない」

「ふうん……」

「ははは、光河、いい加減女装趣味を止めることを思慮するんだな
自分のキャラに合っていないことを口にし、その場を立ち去り自分の部屋に入ろうとすると光河に呼び止められる。

「ねえ兄ちゃん」

「どした光河？」

「夏休み暇だからどっか連れて行ってよお」

おねだり口調で言ってくる妹……では無く弟。

「時間が出来たら……」

「むっ……」

弟はつまらなさそうに俺を見る。

俺はそう言っつて弟に背を向けた。この時の俺は、まさかあんな事態になるとは少しも思わなかった。

ジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリ

「ん……………熱い……………眠い……………って今日はプールの日じゃねえか」

今日は八月一日。御月と仔那珂と一緒にプールで泳ぎに行く日である。

勢いよく起き上がり目覚まし時計を見る。時間は九時二十分。集合時間は十時なのでゆっくりする時間は無い。水着は昨日荷物に入れて準備している。財布の中身も少なくなはない。

「よしっ、いざプールへ！」

速攻でパジャマから普段着を着て荷物を持つ。そしてドタドタと階段を下りて適当な菓子パンを口に入れて俺は家を飛び出した。

家を出た後、俺は玄関近くに置いてあるマイ自転車に跨りペダルを漕ぐ。そして荷物が自転車の籠に入らないので俺は荷物を背中に掛ける。

「うおおおおおおおおお

！」

八月一日は真夏。太陽が燦燦と輝き俺の体力をじわじわと減らしていく。

急がないと電車に間に合わない！ ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ、ダッシュ。

神奈川の電車は東京よりも数が少ない。と言っても田舎にくらべたら随分数が多く首都とほぼ変わらない。しかし、その一分、二分の違いが遅刻を招く結果となるのだ。

だから俺はペダルを思い切り回す。少しでも緩めてしまったら女子が俺を待つことになってしまうからな。それは恥ずかしすぎる。

『うっっ、うっっ、うっっ……………』

「？」

ペダルを回していると何やら荷物から声が漏れる。分からない。

日本のバッグ業界はとくに生きるバッグを作ったというのか？

しかしまだ『うっ』としか言っていない。もしかしたらバッグの揺

れた音かもしれない。

『うっ、うっ、うっ……………痛っ』

「？」

次はバッグから『痛っ』とはつきり聞こえた。幻聴では無いはずだ。

しかし、解せない。どうなっているんだ、俺のバッグは？ 確認したいが確認できない。もしも止まって確認していたら100%遅れる。だからこの件は後回しだ。

でも気になるな……………。

このバッグに何が入っているんだ？

そしてようやく着いた駅で、自転車置き場にマイチャリを置く。

俺はダッシュで切符を購入して電車へと乗り込んだ。

電車の中は涼しく、ペダルを全速力で漕いだ汗ダラダラの俺を癒してくれた。

「よしっ、これでどうにか間に合いそうだ」

今日俺達が行くプールは、秋葉原で最近出来た『プールメイド秋葉』

。あの電化街の建物を買収して作った施設である。アニメイト、とらのあな、などの有名な萌ショップを楽しみに秋葉に来る人も多いが最近はこのプールを目当てに来る人の方が多いように見える。

「……………」

そんな楽しみの前にまずはこの危険物をどうにかすることが先である。

電車の席に座り、俺は荷物のチャックを恐る恐る開ける。

よくよく考えてみると俺はこんな大きな荷物を用意した記憶は無い。もう少し小さいサイズで自転車の籠に入る物だったはず。あの時の俺は遅刻しそうでそこまで気が回らなかったのだ。

バッグのチャックを開けると男子物の水着があった。それは当たり前である。そしてその下に……………、

スクール水着が入っていた。

スクール水着……………。スクール水着……………。

!?

心の中で叫ぶ俺。もしもこの電車で叫んでしまったら、俺は大変
気まずい時間を送らないといけないことになる。変態としての視線
で見られることは間違いないのだ。下手すれば警察沙汰。

「な、何でこんな物が……………」

しかも高校生サイズで無く小学生サイズの大きさ……………。

荷物の中身を警察に見られたら、即ポルノ法違反で縄に掛かる。

訳を話して釈放されてもそれは気分の悪いものだろう。

っていつかそもそもその段階で……………、

何でスク水が入ってんの？ 陰謀？ 濡れ衣？

「訳分からん……………」

電車で荷物を人に見られてもいけないので、俺は乗員に背中を向
けてバッグを開ける。

「スク水に……………大量の鬘？」

黒髪ポニーテール、ピンクのポニー、紫のロング、他にも色々な
鬘が下の荷物を隠すように敷き詰められていた。

そしてこの時俺は謎が解けた。下に何が入っているのか……………。

「おい、光河出て来い」

「……………」

バッグは喋らない。それは当たり前だ。しかし、バッグが人の体
温ぐらい温められているのは不自然だ。

「光河、三秒以内に出てこないと女装写真を町内にばら撒くぞ」

光河は学校の友達に内緒で女装している。つまり知られたくない
のだ。コスプレ趣味のことを。実際のところ光河が姉のようにオタ
クを隠していないなら逆に俺は脅されてもおかしくはない。

「い〜ち、に……………」

二秒が経過した時、高い声がバッグから聞こえる。

「ちよつと兄ちゃん、三秒はあんまりでしょ。せめて十五秒は時間
が欲しい」

歪に歪んだバッグから出てくる顔と右手。

その顔は俺が良く知っている顔であった。

「さつさと出て来い。話はそれからだ」

俺は青筋を立てて本気で苛立っている。

「そんなに怒らないでよ」

半泣きで訴える弟。汗がびっしりとついている。よっぽどバッグの中が熱かったのだろう。しかし、同情する気は一切ない。

「さつさと出て来い！」

半泣きだろうと関係なしに頭を叩く俺。

バッグから体全体を出すことが出来た弟は、現在電車の座席で正座をしている。

「で、お前は何しに来たんだ？」

「えっと、兄ちゃんに付いてきた」

弟はうつすら涙を浮かべて言った。

「何で？」

「ええと……………暇だったから……………」

「暇だから？ 友達と遊べばいいじゃないか。お前だってトモ君やマコト君と言った友達がいるんだろ。あれは架空友達か？ あ？」

俺はカツアゲする不良と同じように弟を容赦なく脅す。

すると俺は光河に返しにくい発言をされる。

「うん。トモ君もマコト君も架空友達で実際は存在しないんだ。だから兄ちゃんに遊んでもらいたいなあって……………」

「え？ 本当に？ あの友達の名前嘘なの？」

弟の友達架空発言に目を見開いて俺は裏声が出てしまった。

「うん……………意地を張っていただけ」

弟は涙をポロポロと流す。

へビィ

重い、重い、重い、重い、重い、重い。

こういう場合はどうしたら良いのだろうか？ そんなの関係無しに怒り飛ばせばいいのだろうか？ でもそれは余りに酷のような気もする。

「だから駄目かな？ 僕家でいてもやることないし……」
チワワのような眼で『捨てないで』と言わんばかりに見てくる光河。

そんな弟に俺は強く言えず、ついには許してしまった。

「分かった。でも今日は友達と遊びに行くから大人しくしておけよ」
「やったー、いええい！ 今度はトモ君とマコト君と優斗とも呼んでしよう！」

同情して許すと光河は態度を一変して両手を挙げて喜んだ。

「お前な……さつきまで……ってあれ？ お前まさか架空友達つてのは……嘘なのか？ 本当はバリバリ友達いるじゃねえか！」

「あ……」

光河はマズイと言った表情で口に手を当てる。

「光河ああ……どういうことだ？」

「まあ良いでしょ。兄ちゃん」

弟は目を細めて子ども特有の怒れない笑顔を作る。

もし今から一人で帰れと言っても小学生一人は不安だし……女みたいな顔だから危なっかしいし……はあ……。

溜息をついて俺は再び同じ注意を言った。

「大人しくしておけよ」

「和磨」

「和磨君」

「！」
「！」
プールメイド秋葉につくと二人が手を振りながら俺を呼ぶ。
遅れたと思い携帯を開いたが、九時五十七分で集合時間の三分前だった。

既に行列が出来ており開店前から皆並んでいる。プールメイド秋葉の入口にはメイドさんが手でハートを作っている絵が描かれている。それ目当てか写真を首に掛けている人が多いようだ。

「ごめん、待たせてしまったかな？」

「別に待っていないわよ」

「うんうん、私もそんなに待ってないよ」

二人は意外にも優しく迎え入れてくれた。

そして俺達は行列の後ろへと並ぶ。本当は関係の無い光河も一緒に。

くそつ、本当は無料で来られたはずなのに、こいつがいるせいで俺は自腹を切ることになってしまったじゃないか。

「それよりもその子は誰なの？ 可愛いわね」

御月は目を輝かして俺の弟を指差す。

「ああ、ごめん俺の兄弟だ。勝手に付いてきた妹では無く弟……いや、性格にはオカマかな？」

「に、兄ちゃん……」

光河の頭にポンと手を置き紹介する。

こいつは非常に完成度の高いオカマ。オタク用語では男の娘とも言うらしいが実際のところオカマに変わりない。

「オカマってことは男なの？ もしかして女装趣味を持っているの？」

御月の次に仔那珂が光河に興味を持つ。

「うん、まあそうなるかな」

「兄ちゃん、僕が女装オタクのことは秘密だつて言ったのに」

光河は裏切られた感マックスの顔で俺を見る。

「二人はお前と同じオタクだし別に言っても良いかなと思ってさ」

「うう……兄ちゃん、こいつらは何なの？ 僕と同じ女装趣味の二人？」

「馬鹿つ！ 二人とも女の子だよ！」

「嘘だあ、だって兄ちゃん女の子と遊んだこと一度も無いじゃん」

「うるさい！ 余計なことを言うな！」

光河が初対面の二人に天然の悪口を発言する。ついでに兄貴の俺にも。

俺は悪口を言われた二人の顔を窺って「ごめん、こいつ口が悪い

から」と光河の頭を下げさせた。

しかし二人は悪口など耳に入っていないかった。それどころか二人は好物を目の前にした表情でごくりと生唾を飲む。

そして、

二人は光河に飛び込んだ。

「光河く〜ん」「光河ちゅわ〜ん」

仔那珂と御月の二人は俺の妹っぽい弟を挟むように抱き抱えて頬をすりすりとしている。

そして「ああ可愛い」「持って帰りたい」などと変態発言を連発していた。ロリコンとシヨタコンがどちらも欲しがる男の娘のようだ。

「……………ツー（鼻血が出る音）」

どうやら暑さのせいで俺の鼻はやられているらしい。

「光河く〜ん」「光河ちゅわ〜ん」

二人は教室の時の威厳な姿がまるでなく光河に抱きついていてる。

「止めっ……………兄ちゃん助けて……………」

光河は露骨に嫌な顔をする。そして二人の力に負けてしまう。光河は男と言ってもまだ小学四年生。高校生女子の二人の力には力及ばない。

「光河ああああああ」

「！」

今の光河のポストは女子人気のティンベア、リちゃん人形、東京ディズニーランドのミッキー、ポケモンの黄色いネズミのような立ち位置。

滅茶苦茶羨ましい！俺も光河のように揉みくちやにされたい……………いかんいかん、そんなことを考える俺では無い。最近オタク文化に淘汰される気分だ。

だから今俺がする行動は羨まし……………ではなく困っている光河をあの二人から分離することだ。

「はいはい、二人とも落ち着け。まだプールに入っていないだろ。だからその辺にしてくれ。光河も困っているから」

しかし、俺は会話の単語の一つ一つに気にかけていなかった。

「「まだ？」」

そして彼女達は素直に光河を離した。

「分かってくれたか……」

どうやら理解してくれたらしく素直に弟を離してくれたらしい。

「プールに入ったら光河ちゃんとなつぷり遊ぼうつと」

「あたしが先よ。光河くんは一応男の子だからどちらかと言ったらシヨタ寄りでしょ」

「そんなのは関係ないよ。顔が女の子みたいなんだから」

「「むむむむむううううう」

二人は睨みあつて光河の争奪戦を続行している。何で？

「あの二人とも……何で光河の争奪戦をしてるの？ プールでも光河は」

光河は渡さないと口にしようとしていたが二人の眼を見てとても言えなかった。言ったら最後地面の底に次ぐ底に落とされそうなのでな……。

「さつき和磨言ったよね。まだプールに入っていないだろつて」

「ああ、言ったかな……」

「確かにそうだと思うた。プールに来たのにプール前に抱きついていたらがつつき過ぎだもんね。だからプールに入った後にね」

彼女は学校の傲慢な性格からは思えない可愛い笑顔をする。

「ああ……「まだ」をそう取った訳」

……「まだ」の二文字の使い方を今後検討することにするよ。今回のプール……光河が来たことにより価値が半減してしまったな。男一人と女二人の組み合わせが……男一人、女二人、オカマ一人になってしまった。

『お帰りなさいませ、ご主人様。何名様でしょうか？』

猫耳メイドさんからの甘い声が掛かる。

そうこうしている内に俺達は列の一番前に来ていた。チケットを渡す前に俺は疑問点を店員メイドさんに聞く。

「こんなに暑い時に……何でメイド服さんがいるの？」

プールの店員にメイドって……絶対にあついよな、そのコス。このプール施設作った人の方針を疑うよ。

『ご主人様に会いたいですよ』

メイドさんは真夏にメイド服を着ているにも関わらずいつものように笑顔を振りまいていた。仕事魂凄いな。いや、マジで。

メイドさんと俺で会話をしていると光河が目を光らして叫ぶ。

「凄いや、兄ちゃん。こんなに暑いのにコスプレして頑張っている。僕も見習わないといけないよね。同じコスプレイヤーとして!」

「……見習わなくていいぞ」

それにその目の輝きもつと違うことに向けるんだな。小学四年生がコスプレイヤーの仕事に感銘を受けるって……それは果たして良いことなのだろうか？

『後が支えているんで人数言って、早く入場券を渡して下さい』

声のトーンが下がったメイドさんを見て、俺は急いでポケットの入場券を取り出す。

「は、はい……四人です」

人数を言って、無料入場券三枚と自腹を切って買った千二百円の入場券をメイドさんに渡す。

っていつか小学生で千二百円は高すぎるだろ。田舎のプールならタダ同然の金額で涼めるのに。まあ田舎に大掛かりなアトラクションはないだろうけど。

『はい、ではプールメイド秋葉で良い思い出を』

「分かりました。メイド頑張ってくださいね……」

汗だくの俺は同じく汗だくのメイドさんを応援する。御月に聞いた話だとメイド喫茶は時給が高いらしい。あの涼しい店内でも高いならここはもつと高いんだろうな。

入口に入ると更衣室の案内と絵が描かれていた。左のメイドさんが女子の更衣室。右のタキシードを着たBL風の男の方は男子の更衣室。真中にトイレが設置されていた。

「本当にプール楽しみ」

「うん、楽しみだね」

「じゃあ後からプール広場更衣室出口で合流しよう」

「うん、分かった」

二人は頷いて手を振り、左の更衣室へと入って行った。
しかし、問題はここに残っていた。

「兄ちゃん、僕はどっちで着替えたらいいの？」

女物の服を着た妹（仮）は自分に指を差して聞く。

「……………はて」

こいつが持ってきた水着はスク水。だが……………男だ。だからと言って男子更衣室で女子が着替えていたら俺が変態扱いされる。逆に女子の更衣室で着替えさせるのは羨ましい……………では無く弟に変態のレッテルが貼られる。

となると……………、

「お前は男子トイレで着替えて来い」

「ええ！」

顔に縦線を引いている我が弟、蓮見光河。

「そして着替えたらダッシュで男子更衣室を抜けてプールの広場まで来い。大丈夫だ。出口で待つといてやる」

「でも……………僕結果的に男だし男子更衣室で着替えても……………」

「ダメだ。他の着替えている人に舐め回すように見られるのは目に見えている」

「だったら女子更衣室は？」

右が駄目なら左という思考。

「常識の範囲内で考える、光河！」

男とバレたら世間からの風当たりは悪くなる。オタクと知られたことよりも。

俺は目を閉じて腕を組み、深く悩む。

仕方ない。この馬鹿弟に世の中の仕組みというものを教えてやるか。

「良いか光河、男女差別をしないといけないと世界は呼びかけている

がこれは違うんだ。これは差別というより区別。男の人が見られたら恥ずかしい部位があるように女子もそういうのがあるんだ。だから俺はお前が節操のない人間になって欲しくないんだよ。分かったか、光河？」

ん？ 返事が無いぞ？ もしかして小説や漫画の主人公のように、長い話に耐えられずに眠ってましたみたいな王道なことを？

腕組を解き俺は目を開ける。するとそこには誰もいなかった。そして入口の周りで俺を白眼視するプール客の視線。

『……………』

「ははは……………（光河ああああ！）」

そして俺は気まずさのあまりトイレへと駆け込んだ。

「二人とも遅いよ！」

「あたしを待たせるとはいいい度胸ね。和磨！」

出口付近で二人は俺達を呼び掛ける。もう既にプールの特有の塩素の匂いが鼻をつく。そして水泳場に設置されている屋台の美味しそうな匂いも鼻に入ってきていた。

しかし、そんな匂いの魅力をも超えてしまう魅力を二人は出していた。仔那珂は純白白色の水着。御月はピンクと白の水着。更に二人とも凄いポリウムがあった。何のポリウム？ と質問されたら敢えてこう言おう。自分で考えろと。

「悪い、悪い。ちょっと時間を食ってしまった」

「遅いのよ！……………それより何であんた目を逸らしているのよ？」

「ああ、いや、何でもない……………」

俺は顔を赤くして眼を逸らす。直視出来ないのだ。彼女達の水着は。見たい気持ちは大いにあるがずっと見ていたら俺のある部分……………いかん、いかん、自重、自重。

「うぐっ、うぐっ、兄ちゃんが……………」

目を逸らした先には泣きながら立っている光河（スク水着用「変態」）

「あれ？」

「何でこいつ泣いているんだ？ 確かに更衣室トイレで説教はしたけど暴力行為は一切していないぞ。

「ちよつと！ 和磨、あんた弟君に何したのよ！」

「え？ いや何も……………」

「うん、本当に何もしていない。ただいつもより強く説教しただけ。」

「和磨君！ 私見損ないました！」

「ええええええええ

！

「理不尽な二人の対応に俺は暑さでは無い汗をかく。」

「横目で光河に目をやると、笑いを隠していたつもりだったのかわからないが、笑窪が出来ていた。完全にほくそ笑んでいた訳だ。」

「光河……………」（後で覚えてろよ）」

「こいついつの間にかこんなに狡賢く成長したんだ？」

「えへへへ、お姉ちゃん達ありがとう」

「ふふふ、光河くんの為ならお姉ちゃん何度でも和磨を叱ってあげるわよ」

「私も同意です」

「二人は俺の妹（仮）を溺愛している模様。」

「はあ……………」

「それよりも弟（仮）がスク水の件は誰も突っ込まないんだな……………」

「溜息をついて俺達は更衣室から離れ、プール広場へと出る。プール広場の真中に、竜の冠を被ったメイドさんが描かれているウォーターライダーがあった。その規模はでかく、更に傾斜も他の水泳場より大きい。あれがプールメイド秋葉のメインなのはずがる。他にも波プール、回るプール、流れるプールなどたくさん種類の泳ぎ場があった。」

「そして俺以外の三人は魅入ってしまった。萌プールの芸術に。俺

は、規模が大きいな、程度の感想しか生まれえない。それよりも屋台の料理に興味がある。

「で、最初何のプールに入る？」

女子二人に聞いてみる。すると二人はどちらも同じような答えを返す。

「光河くんが行きたい所」

「光河ちゃんの行きたい所」

……複雑な気分だが仕方ない。ここは光河に聞くか。

「光河、お前どのプールに入りたい？」

個人的には流れるプールが良い。喧噪を離れ流されたい気分。だが光河の口から出るはずが無い。こいつは顔に似合わず怖いもの好きなんだ。

「ウォーターライダー！」

「(やつぱりか……………)」

こいつならそう言うと思っていた。前家族で行った遊園地でもジェットコースターに乗りたいと最初に口にした。でもあの時は身長制限の都合上乘ることは出来なかった。しかし、ウォーターライダーは身長制限が無いのだろうか？ 他の水泳場と違い角度も大きいんだが……………。

光河の提案に仔那珂は笑顔。

「ははは、良いね。ウォーターライダー。流石光河くん！」

そして俺と御月はもれなく背筋が凍っていた。

「……………ははは、光河ちゃん、良い案だね。でもそれはクライマックスにやっても良いんじゃないかな？」

「光河、最初からハードだな。小学生だしかもうちよつとレベルが低いのにした方が良くないじゃないか？」

恥ずかしながらジェットコースターの類が苦手な俺。勿論ウォーターライダーも例外では無い。

「嫌。僕ウォーターライダーに乗りたい！」

光河の意見は変わらない。これは何を言っても聞かないな。仕方

ないな。

「分かった。だったら光河と仔那珂二人で行ってきたらいい」

「え？ 何で？」

仔那珂が不思議そうに聞く。

俺は平生を保っているような顔を作る。

「いや、もう少しで飯時だから何か皆の分を買ってこようかと……」

…なあ、御月？」

「うん、うん」

御月も行きたくないのか首を縦に振る。それに仔那珂は光河が大好きだから二人になれて喜ぶだろ。光河は逆に仔那珂が鬱陶しいだろうがそんなのは知らん。

しかし、歓喜すると予想した仔那珂はしかめっ面をする。

「あたしと光河くんが二人になったら、あんた達も二人きりになるでしょ」

「……まあそうだけど。それがどうしたんだ？」

「いや、流石に御月を危険に晒したくないのよ。あんた直ぐに襲いそうだし」

「んなことはせん！ 御月も遠ざかるな！」

必死に否定する我。そして御月は仔那珂の後ろへと回る。

「本当に襲わない？」

御月は仔那珂の背中から少し顔を出して聞く。

その質問自体に苛立ちを感じたが今は誤解を解く時。

「ああ、襲わないし襲ったことも無い。だから引かないでく」

「うん、確かに兄ちゃんは五人しか襲ったことないよね」

「五人も!？」

ついには背中から顔を出すことも無くなった御月。

「光河あああああ　　！」

「えっへへへ」

兄から逃げてベ口を出して馬鹿にする愚弟。

光河が悪ふざけをしたことにより俺と御月との溝が深くなる。仔

那珂も同じく俺をゴミ虫のような眼で見ている。

「光河捕まえたぞ」

ようやく光河を捕まえた俺は、二人の擁護が届かぬ距離へと弟を連れて行く。

「兄ちゃん、止めるよ」

「おい……………光河、お前今日の約束覚えているか？」

「え？ うん、忘れた」

弟は人差し指をそれぞれ頬に付け、可愛さをアピールする。

「もう一度聞く。約束覚えているか？」

恍ける弟に青筋を立てる俺。すると光河は小さな声で口にする。

「……………大人しくする」

「そうだ。それが約束だ。と言つても別にアトラクションで喜ぶのは構わん。けどな、兄を変態にする発言だけは止めるよ」

「……………はい」

「だったら誤解を解け」

「……………はい」

愚弟はしゅんとなりようやく大人しくなる。そして俺は一安心する。少し怖く怒りすぎたのかもしれないな。

「あたし達から遠ざかって何か言えない話でもしていたの？」

仔那珂が怪訝そうに聞く。

「（光河、打ち合わせ通り僕の冗談でした　　と言え）」

「（分かった）」

耳打ちを弟にする。しかし、こいつは反省などしていなかった。

むしろ兄に対する悪戯欲望のグラフが鰻登りした。

「ごめん、兄ちゃんが襲った五人は冗談で　　」

「うんうん」

やっと誤解が解けたか……………。

安心して目を細める俺。

「　　本当は十五人でその中の三人は黒人男性」

光河はにっこり笑い右手の指を三本立てる。

「うおい！」

「えええ……和磨……十五人も……あたしBL好きだけどリアルは……生々しい」

「しかも三人は黒人男性つて……和磨君」

誤解が解けたと思つた俺の笑顔は一瞬で崩れる。そして二人の俺への軽蔑視は更に強くなった。

「お二人とも……違いますよ、あれはあいつの嘘です」

「和磨、もうちょっと離れて……」

「和磨君……見損ないました」

光河を泣かそうと思つたが二人がいる前では出来ない。だから俺は今出来る最大の笑顔を光河に向ける。

「光河、家に帰ったら一緒にゲームしような」

「……………」

光河にそう言うと、犬が尻尾を振らなくなると同様に怯え、それ以上冗談を言わなくなった。

「兄ちゃん……怒ってる？」

光河は声の音量を下げて聞く。

そんな弟に俺は笑顔で返した。

「全然」

家に帰ったら覚えているよ、と言わんばかりの視線で俺は光河に笑顔を送った。兄弟喧嘩はこの家庭も同じです。はい。

そしてスク水姿の変態弟は、尻尾を完全に振るのを止めた。

その後、数分の俺の必死の発言により、どうにか和磨変態説は冗談で終わった。というか冗談で終わらないと世間では生きていけない。

「時間食ったけどさ、そろそろ泳ごうよ。光河くん、ウォーターズライダーが良いんだよね？」

「う、うん」

光河は頷く。俺の止めてくれの視線は届かない。

「じゃあ俺と御月は食い物買ってくるよ」

「うん、私は和磨君と買いに行ってくる」

俺と御月は逃げのポーズを取るが仔那珂に肩を掴まれる。

「せっかくだし……皆で行ってみようよ」

仔那珂は純粹な笑顔を俺と御月に向ける。そんな顔をされたら俺達の返事は分かっている。こう答えるしかないのだ。

「はい……」「うん……」

「よしっ！ 出発進行！」

「おう！」

「……おー」

いつもは傲慢な仔那珂は、光河の手を掴みウォーターライダーへと向かう。その背中を追って俺達も歩く。そして見えないところで溜息をついた。

「はあ……怖い……」

「仔那珂さん元気ですね……」

気の乗らない二人は顔を合わせてもう一度溜息をついた。

「初っ端からウォーターライダーはきついだろ……」

……夢であってほしい。

「……」

ウォーターライダーの列に並び、自分の番がもう少しとなった時、俺と御月は恐ろしさの余り固まっていた。

このウォーターライダー何が怖いかわねえと言われたら三言で終わる。高い。

角度がある。

流れが速い。

これだけで精神の殺傷能力は十分に引き出せるのだ。

メイドプール秋葉の名物。萌萌ビッグジェットスライダーはその名の通り角度が大きく、高さが長い為、恐ろしい速さを出して下へと流れる。いや、落下すると言った方が現実味は出るかもしれない。

「……これ角度殆ど九十度じゃねえ」

か……」

「……だよね……」

固まっている二人は暑さと違う汗を大量にかく。そして二人とも喉が渴いていた。

実際角度は九十度では無いのだが、恐ろしさの余り過大表現せずにはいられない。

「ああ、楽しみい〜」

「僕も！」

そして、固まっている二人を余所に光河と仔那珂ははしゃいでいた。

何で喜んでいるの、お前ら？

「一秒でも早く順番が来てほしいね。光河くん」

「うん。早くして欲しい」

何で君達はこの地獄のウォータースライダーに興奮しているんだ？

今の順番は前から十九番目が仔那珂、その後ろが光河。そして光河の四番目後ろが俺でその後ろに御月と並んでいる。まだまだと思うかもしれないが順番はあつという間に来るものだ。

何故なら降り立つウォータースライダーの滑り台は四つある。一人一人の滑る時間も長くはない。だから実質待つ時間は僅か。

四人が一齐に流れて行く。そして直ぐにまた後ろの人、次いで次の人。

そうこうしている内に仔那珂と光河の番が来てしまった。もうすぐ順番が来る俺と御月は『大丈夫だ』『大丈夫だ』と念を込め始めたところだった。

とにかく心の準備をしておく！ 自分に言い聞かせ瞑想を始めて間もなく、俺に問題が起こった。

『お嬢ちゃん、まだ小学生じゃないか！ 保護者さんは？ このウォータースライダーは他と違って危ない。だから小さい子は保護者と一緒に滑ることとなっているんだよ』

列を整備している萌キャップを被ったマッチョの係員が光河を呼

び止める。

係員さん………そいつはお嬢ちゃんではなくお坊ちゃんですよ。

「え？ 駄目なの？」

光河は目を潤まして係員に聞く。その姿はまさに小動物だった。

すると係員の人は小動物を苛めた罪悪感に駆られ声を落とす。

「………お嬢ちゃん、小学生は軽いからね。もしもの時があつてはいけないんだよ。滑りたいなら保護者と一緒に滑ることだね」

「保護者………いますよ」

「え？ 誰だい」

光河は顎に手を置き顔が明るくなる。

何か嫌な予感がするのだが………。

「兄ちゃん！」

俺を指差す光河。

………何

言ってるの、こいつ？

「この人で良いのかい？」

係員も俺を指差す。

「え？」

何言ってるの、光河？ 俺心の準備一切していないよ。

「このお兄ちゃんが僕の保護者」

抱きついてくる光河。

ええい、気持ち悪い。離れろ！

「ああ、そうなの。分かったよ。お嬢ちゃん」

光河の髪（白い髪の毛）を撫でる係員。

「ええ？ いや、係員さん、ちょっと待って下さい。俺はまだ順番がまだですよ。ですから、他の人に迷惑にならないように後から滑ります」

心の準備が全く出来ていない俺は時間稼ぎをする。今滑ったら間違いない俺は命まで流れる。時間稼ぎをせねば！

「ああ、大丈夫ですよ。順番はお嬢ちゃんとお兄さん合わせて一人

と数えられますので。順番は抜いていることになりません。良かったですね。順番が早まって』

「だってさ、兄ちゃん」

「ああ、そうなんですか……………（ハハハハハハ）」

光河ああああああああああ

！

！（泣）

『ではお兄さん、お嬢ちゃんと一緒に滑って下さい』

「わーい、お兄ちゃん。行こう行こう」

弟（仮）に引っ張られて俺は強大な滑り台の前に行く。

「はははははははははは」

足が竦む俺。

「大丈夫お兄ちゃん？」

光河はわくわくした瞳で俺を見る。苛立つ兄弟であってもこの瞳を汚すわけにはいかない。ここは覚悟を決めて……………、

無理いいいいいい

！ だってこ

の滑り台九十度近く角度があるんだぞ。もう助けてくれ。ぶっちゃけると俺ジェットコースターとかそういうアトラクションを全て敬遠してきたんだぞ！

だから言わしてくれ。

もう止めないこれ？ フィクションの類で終わらして流れるプールで身を委ねるとかどうかな？ うん、それが良い！

『はい、お兄さん滑り台に乗るように一度座ってください』

「行こう行こう兄ちゃん」

「は……………はい」

本当に滑るのか？ 俺は心の準備を全くと言っていいほどしていないぞ。

俺はウォーターライダーへと座る。まだ下をしっかりと見ていない為、精神はまだギリギリ保っている。

だから……………、

今なら逃れるかもしれない。

「うわはははは、あははは、兄ちゃん、これ面白いいい」
顔が引きつっている俺と違い、爽快感と清涼さに満ちている二人
知っているか？ 人間の時間の間隔は気持ちによって変化するん
だ。楽しければ直ぐに時間は過ぎ、つまらなければ時間は長く感じ
る。

つまり、俺は今ウォーターライダーの一瞬を永遠の時間に感じ
るわけだ。

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い

「兄ちゃん！」「和磨！」

幻聴か……二人の声が聞こえる。

「兄ちゃん！」「和磨！」

「う、うん……」

眼を擦り開けてみると、二人が俺を覗き込むように見ていた。俺
はどうやら日陰で寝かされている。右を見ると御月も寝かされてい
た。

そうか、御月もウォーターライダーに挑戦したのか……。

ああ、俺は気を失っていたのか……でもこれで俺達はもうウ
ォーターライダーを滑らなくても済む。

っていうか気を失うウォーターライダーを設計するなよ……
製造規約に引っ掛かるだろ。絶対。

「仔那珂………光河」

掠れた声で俺は二人の名を口に出す。

「やっと起きたわね。和磨」

「兄ちゃん、貧血だったの？ ビックリしたよ、本当に」

二人は安堵の溜息をつく。

ああ、二人とも俺を心配してくれたのか……。

「じゃあ兄ちゃん、もう一回滑ろう！ 兄ちゃんいないと滑れない
んだよ」

「光河くんの言うこと聞いてあげなさいよ。和磨」

「え？」

弟（仮）は手を掴み、地獄のウォータースライダーへと引つ張る。

「ちよ……………光河？」

「行こう、行こう！」

おいおいおいおい、待て待て待て待て、ウェイウェイウェイ
ウェイ、次滑ったら間違ひなく死ぬつて。いや、マジで。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ

二度目の地獄。

「兄ちゃん、次い！」

「ぎゃあああああああ

三度目の地獄。

「兄ちゃん次い！」

「ぎゃあ……………」

四度目の地獄。

「兄ちゃん次い！」

五度目の地獄。

口元を押さえてフラフラな俺。

……………もういつそのこと死なせてくれ。

「兄ちゃん次い！」

もう既に立っていられない俺は引きづかれるように連れて行かれる。そんな六度目を迎える時、仔那珂が光河に提案する。

「光河くん、またウォータースライダーを滑るのもいいけどさ、先に昼御飯を食べない。和磨もね」

「うん、そうだね。僕もお腹すいてきたよ」

「じゃあ決定ね。いいよね、和磨？」

……………その問いに俺は倒れたまま親指を立てた。

現在午後二時二十五分。プール内にあるメイドの時計がその時間を知らせていた。

「光河くん」

「いや　！　兄ちゃん」

波のプールで遊んでいる光河と仔那珂。光河は波よりも仔那珂に恐怖しているよう。

「……………はあ」……………ふう」

言葉を漏らす残り二人。俺と御月。

余った組の二人は、休憩所で座りかき氷を口に入れる。そして俺達は遠目で遊んでいる二人を眺める。

「あいつら本当に元気だな……………」

「そうだね……………」

呆れと感心が混ざった声が出る。

あの忌まわしきウォーターライダーが終わり、俺達は昼食を取った。

光河と仔那珂は昼食をどっさりと買って食べた。そして意識を取り戻した御月と元氣のない俺は、焼きそばなどの重い食べ物を食べられずあっさりとしたかき氷をずっと口に入れていた。これで何杯目だろうか？

「ん？　どうした御月？」

かき氷のハワイアンドブルーを食べていると、隣の御月は何か言いたげな表情で俺を見る。

「でもさ……………いよ」

「ん？　何て？」

手をもじもじさせて恥ずかしそうに見る御月。さっきの言葉は小さくて聞こえなかった。

「でもさ、楽しいよね」

「え？」

御月は顔を赤くして顔を背ける。そして俺に顔を合わせずに話を

続ける。

「私、こんな経験したこと今まで一度もないんだ。大人しいというポジションが最初から決まっていた、クラスメートに遊びに誘われても断るしかなかった」

「……………」

無言無表情で俺は青いかき氷を口に入れる。

「本当はプール、映画、バーベキュー、他にもたくさん友達としかかった。あの時の私は何一つ出来なかった。でも」

重い昔話をしているはずなのに、彼女の声は明るかった。

「今日初めて友達とそれが達成出来た」

綺麗な彼女は綺麗な笑顔をする。その笑顔に俺は思わず魅了されてしまった。オタクの女の子に魅了されたのを否定したかった自分がそこにいた。

「まだウォータースライダー一回しか遊んでいないだろ」

御月は一度のウォータースライダーで気絶したので、プールでは一度のウォータースライダーで遊んだこととかき氷を食べたことしかしていない。

「うん、確かにあれしか遊んでいないね。でも満足だよ。私はもうこれ以上望んでは駄目な気がするんだ」

御月はどこか嬉しそうどこか寂しそうだった。

「そんなことねえよ」

「そうなのかな？」

「当たり前だ。俺はこれからも御月や仔那珂と一緒に遊びたいと思っている。さっき言っていた映画、バーベキュー以外にももっとも」

前を向いて強く俺は言った。今日はまだウォータースライダーしかしていない。でも、皆と来られるだけで面白かった。だからこういう機会を今日で終わらせるのは勿体ない。こんな機会はこのプールで終わらしたらいけないんだ。

「ははは、和磨は非オタクじゃ無かったの？ だってこのプール何

から何まで萌が取り入れられているよ。建物から料理まで。このかき氷もメイドさんが描かれたカップが使用されているし」

そして御月は、メイドさんが描かれているかき氷のカップを目の前に突き出す。

「確かに俺も自分自身が分からない。オタクはまだ受け入れられないけどさ、昔よりは良いものと考えているよ。オタクの人って全員が電波なことを口にするだけの人種と思っていたんだ。でも違う。夢を持っているんだよ」

かき氷を床に置き俺はしみじみと話す。

「夢？」

「砕けた言い方もしれない。でもオタクの人って熱意があると思うんだ。ファミスちゃん俺の嫁とか声優ラブとかそれに対する熱意が強い。だから俺はそこが凄いと思う。俺は熱意すら無いんだから」

「少し認めた？」

御月は穏やかな性格に珍しいちよっかいを出す。

「ほんの少しだけだよ」

「あはは、本当？」

「本当、本当……ってどうした？」

媚笑を浮かべ肩を寄せる御月。

「和磨君、知っている？ オタクや大人しい子ってさ……少しでも優しくしてもらうと他の人以上にその人のことが気になるんだよ」

「あはは、御月もそうなのか？」

俺は朗らかな気持ちになり笑う。

「うん……って何も分かっていないでしょ。客観的ね」

「え？ いや、オタクと大人しい人は普通の人以上に恋に落ちやすいんだろ」

「むう……やっぱり何も分かっていない……（この鈍感）」

「あははは、はは（何かマズイこと言ったかな？）」

間を持つ為にとにかく笑い続ける俺。

そんな俺達を見て仔那珂は浮き輪を投げってくる。

「何ヘラヘラしてんのよ、和磨！ さっさと泳ぐわよ。御月も」

「呼ばれているよ、和磨君」

「お前もな」

二人顔を合わせ更に笑う。

「兄ちゃん急いで！ 波がもう直ぐ来るよ！」

「御月も急いで」

俺は床に濡れて落ちていている浮き輪を手に取り、ザブンと波のプールへ入る。その後、御月が続くように入る。

そして俺は景気の良い声で三人に言った。

「さあ、もうひと泳ぎしますか！」

「楽しかったか、光河？」

「うん、兄ちゃん」

あれから俺達は波のプールを楽しんだ。その後、流れるプールで身を任せ、最後にプール売場で売っていた水着ショップで時間を使った。二人の水着の試着は似合っていた。そして弟も試着したわけだ。……それは凄く似合っていた。女物の水着が。

そして楽しいプールも終わり、現在俺と光河は帰宅中である。今は明るくもないが暗くもない。何かに例えることが出来ない微妙な明るさだ。

弟（鬘を被って女装モード）は純真の笑顔を俺にする。

「そうか。そいつは良かったな」

「うん！！ 次も連れて行ってね」

「はは、そうだな……って連れて行くわけない。今回はお前が勝手に尾行してきたからプールに入れてやったんだ。しかも俺の自腹だしな」

「ケチ、じゃあ次もこっさりついていたらいいのかな」

「ははは、って止めるよ」

微笑を浮かべる俺。子供の考えていることは意外と盲点をつくの
で面白い。またもう一度ついていったら仲間に入れてもらえるとい
う発想。光河が考えそうなことだ。

でも今日は本当に楽しかったな。コスプレ好き（女装）の弟、B
と好きの仔那珂、幼女とコス好きの御月、三人と一緒に行ったプー
ルは楽しかった。前の夏に末代や街部と普通のプールと一緒に行っ
た。その時も面白かったけど今日は今日でいつもと違って新鮮だっ
た。やっぱりプールは良いな。

「ふっ……」

「どうしたの、兄ちゃん、気持ち悪いよ、いきなり笑ったりしたら
馬鹿言え。光河」

勘違いしていたのかもしれない。オタク文化は最悪なものだから
無くして欲しいと。でも実際はオタクと遊んでも素直に笑えたし本
当に楽しかった。

……本当どうかしている。オタクを嫌いと思う自分が消えて
いるなんて。

「はは、あはは」

「兄ちゃん……笑苺でも食べた？」

弟（仮）は俺のことを白眼視する。

しかし、俺の自分の中の大事な整理は続く。

もしかしたら俺はもう非オタクでなくなっているのかもしれない。
オタクを嫌いという気持ちは今浮かばない。ということは……

……、
自分が分らなくなって混沌していると、聞き覚えのある声が掛か
る。

「あれ、和？」

「和磨じゃねえ？」

「ん？ ああ、街部と末代か……奇遇だな（良かった）」

ラフな服装のクラスメートに偶然遭遇する。

内心ほっと安心する俺。もしも御月と仔那珂がいたら大変なことになる。次の日に顎にパンチをお見舞いされるかもしれない。

しかし、安心をするのはまだ早かった。

「和、やけに可愛いお嬢さん連れてくるな」

「……君は和磨とどういう関係なの？」

二人は興味津津に俺の弟を見る。二人の眼には女の子しか映っていない。それもそのはず俺の弟は童顔の女顔、白髪の鬘にスカートを穿いている。これで女に映らない人間は中々の眼力があるといえよう。

しかし、どう言い訳しよう？ こいつは俺の妹だ！ と言いたかったんだがこいつらは俺の兄弟構成を知っている。勿論オタクの事実は教えていない。教えたら絶交は無いだろうが今のように柔和な会話は出来ないだろう。

従ってここは親戚辺りの言い訳が妥当だろう。

質問が俺でなく、光河に対してなので俺が口を出すのはよくないだろう。

「（光河分かっているよな）」

親戚と言え！ オタクとはバレたくないだろ！

こくこくと頷く弟。

耳打ちをすると怪訝な目で見られて怪しまれるので、俺は眼で訴えかける。大丈夫だ。兄弟は意思疎通が以心伝心レベルで出来るのだよ。ふふふ。

「で、結局和の何なの？」

「もしかして和磨の親」

二人は眼をキラキラ輝かせて聞く。

「（さあ言え光河！ 日常は我々のものだ！）」

「私は恋人です」

「え？」

最初は街部と末代の一文字だった。

そして俺が遅れて同じ一文字を口にする。

「え？」

何を言っているんだ、光河？ 悪ふざけが過ぎているぞ。そんなことを言ったらこの馬鹿達は……。

恐る恐る彼らの表情を伺うと、彼らは怒りのオーラに包まれていた。赤と黒が波になっているようなオーラ。

「あの……」

「和磨ああああああ」

！」「和うううう」

！」
弁解する前に怒鳴られる俺。二人は目を黒くして拳を固める。

そして近づいてくる街部と末代。

少しずつ、少しずつ、

その拳を俺に振りおろそうと近づいてくる。

「え……ちよっ……おい、嘘だ。これには理由が……」

顔から汗がたらたらと出てくる。そして両手を前に出して説得しようとする自分。

しかし、近づいてくるその拳。

「和磨ああ……」「和うう……」

ぐっ……仕方ない。ここは真実を告げるのみ。

「そいつはオタクで女装趣味の男だ！ だから俺はそんな奴を恋人にする気はさらさら無いしそれに……俺は女が好きだ！」

女好き発言は問題のような気もするが今はその後のことなど考えん。今大事なのは今を切り抜けること。ただそれだけ。

そして俺の真実を聞いた二人は光河を指差す。

「和磨……俺はがっかりだ。こう見えて俺はお前を買っていたんだ。学校でも学校外でもお前を買っていたのに……とうとう嘘をつくとは。こんな子が男な訳ないだろ。常識の範囲内で嘘つけや」

街部が俺に対し失望の念を見せる。そして彼の拳はぶるぶると震えていた。

あれは力入れているな……………。

「違う」

「和……………僕も呆れたよ。オタクはふくよかな体型。眼鏡でアニメの絵が描かれたリュックやトートバッグ持つ人でしょ。……………それにこの子が男な訳がない。だってスカート穿いて髪も白髪ロングだ。誰が見ても女の子決定」

「違う」

確かに俺も昔は末代のようなオタクへの偏見を持っていた。でも実際は違う。御月や仔那珂のようにすらっとしていてマドンナ的存在の人もいるんだ。それとな、お前らがどう言おうとそこにいる光河は男だ。

そして更に続く俺への呆れ声。

「ロリコンは無いわ。このクソオタク」「しかも恋人……………引くわあ」
二人は俺へ更に接近し、拳を振りおろすと俺の顔面へと当たる距離になった。

「あの……………お二人とも……………これには訳が」
つい敬語を使ってしまう俺。

そして俺は最後の悪あがきで弁明をしようとした。

二人はにっこりと笑う。

「え？」

そしてその刹那、俺へと悲劇が舞い降りた

「「問答無用!!」」

痛みという確かな衝撃と変えて。

これも全て女装趣味の光河のアドリブのせい。ラノベ的アドリブしやがって……………。

「オタクなんて嫌いだああああああああああ

そして、非オタクの叫びは、
「！」
帰り道を駆けて行った。

俺とオタクと二次元道

「来たああああ　　！　シヨトラブセレクションの愛輝くんの
フィギュア！　これ予約無しだと中々見つからないよ！」

「予約してなかったの？」

「うん、色んなフィギュア見ていたら忘れていたの……………あたしと
したことが本当に迂闊だったわ」

「そうなんだ。でも私は小さい男の子のフィギュアは興味が無いな。
私はこっちの幼女コーナーに置かれているフィギュアに興味あり」
現在俺達が立っている秋葉原店にはフィギュアだけでなくアニメ限
定カードやゲーム、ライトノベル、漫画、グッズと様々なものが置
かれている。しかし、最新のものは置かれていない。最新の物や特
典がつくものは大体アニメイト、とらのあな、と言った有名店であ
る。

その秋葉原店のフィギュアコーナーでぴよんぴよんと飛び跳ねて
喜ぶ仔那珂。そしてその近くの幼女コーナーで仕切られているフィ
ギュアを眺める御月。

それは無邪気で可愛い笑顔だった。

「愛輝くんのフィギュア高いけど……………あたしのモチベーション上
げる為には仕方ない出費かな？」

「ああ、この幼女戦士フィギュア完成度低い……………絵師さんの足引
つ張りすぎ！」

無邪気且つ純真無垢でフィギュアを眺める二人。

別にそれは良い。趣味なのだから。

ただ、

一つ聞いていいか？

「何で俺もここにいるの？」

「ぼかーんと立っている俺。その問いに二人はフィギュアを眺めた
まま答える。」

「和磨に荷物持ちをさせる為」

「和磨君にオタクの素晴らしさを知って貰う為」

「はあ？」

訳が分らない。

俺がオタクに理解を示すはずないだろう。前のプールの帰りに思い知らされたよ。その後の悪友二人との状況は、メールで何度も説明したけどまだあの二人はロリコンと俺を罵って怒っている。夏休み中にはどうにかして誤解を解きたいものだ。

仔那珂に『買い物に一緒に行こう』との電話の着信音で起こされたと思つたら、まさかこんなことに巻き込まれるなんて。服屋で服の買い物を持たされるならまだいい。けどこの場所で待たされるのは酷だ。仔那珂のメールに『勿論、勿論、勿論』とテンションマックスで送り返した純情がバカみたいだ。

店内の時計は十二時二十五分を差している。そして今日の日付は八月十三日。

「ああ、これも買おうかな……」

「可愛いな、幼女戦士のリフリーちゃん。買おうかな？ でもミルクちゃんのバージョン変化後も欲しい……」

二人は時間を気にせず、次々と標的を変える。

「……………あの、そろそろ昼食にしませんか？」

現在我が腕は二つの買い物袋でいっぱいになっている。その買い物袋は黒くて中身が見えないようにしているのだが、アニメグッズが飛び出しているのでカモフラージュを成さない。

「うん、もう腹減つたの、和磨？」

「うん、うん、うん、腹が減って死にそうだ」

正直腹など減っていない。でもバッグ持ちで疲れた腕を休ませるには良い休憩時間だ。

「うん、あたしは賛成。御月はどう？」

「私も構いません」

二人がそう言ったので俺は安心して腕の力が抜ける。

そして、

持っていた袋が店の絨毯に強く打ちつけられる。

「ああああああああああ

！ ムキシ

ヨタ3・5の番外編ゲームが入っているのに！」

「きやああああああああ

！ 幼女戦

士のミルクちゃんのミルク装備のフィギュアが入っているのに！」

二人は俺に怒りを向ける前に、打ちつけられた買い物袋に駆け寄る。幸い二人の心配する物は傷一つついていなかった。

「ああ、良かった。傷一つついてない」

しかし、打ちつけたのは事実。変わることはない過ちである。

「和磨……………」 「和磨君……………」

二人は怒りの視線を俺に向ける。そりゃあ当然である。

「二人とも結果オーライだ」

引きつった笑顔を二人に送る。

すると仔那珂は一学生に厳しい言葉を俺に送った。

「和磨、飯代あんた持ちね」

「え！？」

「え、でも仔那珂さん……………それはちょっと和馬君が……………それに今日は……………」

今日？ 今日がどうかしたのかな？

「（御月！）」

「（ああ、ごめん。仔那珂さん。つい……………）」

その言葉を聞き、仔那珂は御月に耳打ちをする。何を話しているんだらうか？

「大丈夫、大丈夫。和磨は太っ腹だから」

「そうなんでしょうか？」

二人はあろうことが飯代を俺に奢らせようとしている。

そんなのは嫌だ。と口には出せない。仔那珂のあの怖い笑顔を見た瞬間に。

だから俺はいつも通りへたれを継続するだけ。

「俺に任せなさい」

その時の俺の笑顔がぎこちなかったのは言うまでもない。

昼食を取る為に訪れた場所はメイド喫茶ラブ　メイ。ここは人も来ない隠れスポットなので安心して昼食を取れる。しかし、値段が高いことに付け加えて雰囲気にも馴染めない。ここは本当に適当な場所だったのか？

馴染めない理由は勿論この環境。

玄関先で掛かるメイドさんからの挨拶。

『お帰りなさいませ、ご主人様、お嬢様ニヤ』

「ただいま」

御月は元気よくだいまの挨拶をする。すると幼顔で黒髪ポニテールのメイドさんが景気よく御月に話し掛ける。胸には研修中と書かれたバッチが付いてある。

そう言えば御月はこのバイトだったな。

「あれ？　御月さん何で？　ああ、今回はシフト関係なしに遊びに来ているんですか？」

「うん」

「そうなんですか？　ははは、なら分かりました。御月お嬢様」

「あはは、固いよ。唯」

「ははは、当たり前ですよ。仕事ですから。それに先輩ですし」

「仕事か……俺は別に構わないけど他の客は聞きたくない単語だろうな。」

「ああ、そう言えば御月お嬢様、今日はにゃんデイなので語尾に『にゃん』が付くようになってるんですよ」

「いいなあ。ああ、私も今日シフト入れておきたかったな」

「はい、今日は楽しいですよ」

彼女は笑わず口にした。本当に楽しいと思っているのだろうか？

「にゃんデイ？」

空気を読んで二人の会話に入らないと決めていた俺は思わず聞い

てしまう。俗にいう俺はKYなのだろうか？

「にゃんデイは語尾に『にゃん』を付ける日なの。他にもたくさんあるんだよ。ツンデレデイはツンデレになって主人の注文も素気なく聞くの」

「素気なく？ ご主人様なのに!？」

「うん、メニューも渡すんじゃないかって投げるよ」

「はあ!？」

予想がつかない。メニューを投げる？ 最悪の対応じゃねえか！そんなことでよく店が潰れないな。クレームが来てもおかしくないぞ。

「でもそれがサービスだよ」

「サービス!？」

それがサービスってことは……………客はDMなの？

「で、ご主人様が帰ろうとしたときはデレながら呼び止めるの『また来てよ。ご主人様』みたいなことを言ってるね」

「何その変わり身!？ 完全に魔性の女だな!」

つい大きな声を出してしまう俺。

突き放しておいてからの引きとめ!？ ……オタクの方の興奮ポイントが俺には分かりません。いや、本当にどうかしていると思う。他には何かあるのか？」

「うーんとね、毎月二十一日に兄ちゃんの日があるかな」

「兄ちゃんの日?」

何だ、それは？ 兄弟構成を聞いて兄の人には何か特典があるとかそんなところか？

「うん、兄ちゃんの日にはお客さんに『お兄ちゃん』って優しい声で掛けるの。でも呼び方のオーダーはご主人様次第だからお兄ちゃんの他にも『兄貴』『お兄さん』『兄様』『兄タン』といった具合にたくさん呼び名が変わってくるんだ」

「……………兄タンは無いだろう」

オタクの皆さんの気持ちを無視して発言するのなら俺は言いたい。

お前ら何で兄貴呼ばわりされてんの？　ここにいるメイドさんは妹でもないし義妹ですらないだろ。

「逆に姉ちゃんの日もあるよ。私達が姉役をするの」

「姉か……………」

実際に姉がいる俺は、ここのメイド喫茶で姉の日に行ったらどんな気持ちになるんだろう

うか？　複雑だろうな。他の女の人に名前を呼ばれる……………一度行ってみたいかも……………っていかんいかん。これだと完全にオタク思考だ。

「らぶ　メイは比較的姉属性の方が多いかな？」

「そうなのか……………」

知らない情報を耳に入れ苦笑する。

「他には……………」

御月は楽しそうに続けて語ろうとする。聞いていたら永遠に続きそうので俺は御月の話を強制的に終らした。

まだ店の玄関だから長話は敬遠すべきだろう。

「ああ、もう言わなくていい。というか言っな。その話だけで日が暮れそうだ」

「むっ、これからが面白いメイド喫茶の情報だったのに……………」

御月はつまらなさそうな表情で拗ねる。

……………俺から聞いておいてこの言い草はあんまりか。

「御月、とにかくありがとう。色々知れた。言わなくていいって言ったのは御月の説明で十分知れたということだ。勘違いするなよ」

「それなら嬉しい」

言い方を変えたら御月は満足そうに笑顔を見せてくれた。やっぱり御月は一番笑顔が似合っているな。まるで向日葵のような笑顔だな。

「話は終わりましたか？　ご主人様、お嬢様。よろしければ席へご案内します」

黒髪ポニーテールの女が俺に聞く。

しかし、俺は何故かこいつの言動に納得がいかない。俺は頷くことも返事をすることもなく頭をかいていた。

「和磨、どうしたの？ 案内してもらわないの？」

「ああ……ちよつと待って」

子那珂に言われ、俺は右手を前に出し、待っての合図を出す。

もう少しでこのもやもやが判明しそうなんだ。そして俺の謎は思つたより早く解けた。ある会話によつて。

『お帰りなさいませ、ご主人様ニヤ』

『ただいま』

入ってくる一人の客。青いリュックを背負い黒の眼鏡を掛けている。そして服にはワンポイントのアニメキャラの絵が描かれていた。……この人完全に常連さんだろう。ただいまっていうかここに来る気満々だったよね？

『ふふふ、そのにゃん口調可愛いでござる』

『本当ですかにゃ？ ご主人様』

『当たり前だろ。僕チンは君のご主人様なんだから』

青いリュックの男はでへへと気味悪く笑う。

「……………ござる？ 僕チン？ それにこの人何で上から目線なの？」

『ではご主人様、席へご案内するニヤ』

『ふふふ、頼むよ』

「……………」

メイド喫茶の常連さんは皆こんな感じなのか？

俺が別世界の人を見る目で見てみると、黒髪ポニーテールのメイドさんが困った顔で話しかける。

「あの、そろそろご案内しても……………？」

このメイドの口調を聞き俺は謎が解ける。

「あのさ、今日はにゃんデイなんだろう？ 他のメイドさん見ていて分かったけどさ、お前語尾のにゃんを忘れてるぞ」

「あ……………にゃん」

猫耳をつけた黒髪ポニーの女は、口に手を当てしまったという表

情をする。そして更にボロが出てしまう。

「ああ、私このメイド喫茶のバイト始めたのがつい最近だったからなあ。実際はこのバイト好きじゃないけど時給が高かったから選んでしまったんだよね。キャラ作りとか本当大変だし……………アニメとかよく分からないよ。それに客もリクエストが多くて困るんだよね。メイドさんが本当にご主人様を愛しているかって言われたら、な訳ないし……………ここ辞めようかな……………でも時給が高いんだよね……………」

「……………」

ペラペラと禁句を喋りだす黒髪ポニーテールの女の子。そんなメイドさんに話し掛けられない三人がいた。

これ……………絶対心の声だよな。

「おい、お前心の声漏れているぞ」

「ふえっ……………にゃ……………ん」

黒髪ポニーは泣きそうな顔をしている。どうやら心の声で合っているようだ。

「あ、あの……………」

黒髪ポニーは更に泣きそうな顔になる。

ああ、女の子のこういう表情俺慣れていないんだよ。

「別に俺の前では言い繕わなくて良いよ。俺オタクじゃないから。

ここに来て言うセリフじゃないけどさ。俺昼食食べる為に寄っただけだからさ」

「……………そうですか」

「ああ」

メイドさん目当てで来ていないと知って、安堵の溜息をつく黒髪ポニーの子。

気持ちは分らないでもない。大体の客がメイドさん目当て。あんな言葉を言った瞬間クビにさせられること間違いないな。

しかし、仕事は仕事。当然先輩に怒られるのは必至である。

小さな声で怒る先輩の御月。目には怒りの火がメラメラと燃えて

いる。

「唯！ 私達以外の場所であんなボロ口出したら即クビだよ！ 分かっている？ 次からはあんなミス許されないからね！」

「はい……」

新人のバイトの子は深く頭を下げる。

「御月……その辺にしとけよ」

しかし、メイド喫茶のことにはキャラが変わる御月。

「和磨君、これはうちの問題なの！ 唯、頭を下げたら良いってもんじゃないの！ 分かった？」

「はい……すみません、御月さん」

そして三分ほど説教を終えた後、俺達は案内をしてもらった。

「こちらが席となっています……ニヤ」

怒られたこともあり、研修生はしょぼんと背中を丸めていた。彼女が犬だったら尻尾が垂れさがっているだろうな。

店内を眺めると前みた時と同じ豪華なシック作りのメイド喫茶。

「こちらがメニューとなっています……ニヤ」

「ああ、ありがとう」

渡されたメニューを受け取る。一覧を見ると前と同じメニューに加え期間限定メニューとにゃんデイ特別メニューが書いていた。

メニューを見て二人は笑顔で聞く。

「ねえ和磨、何万円まで頼んでいいの？」

「和磨君、何万円まで頼んでいいの？」

「え、はは、何だ、それ？ 面白いな」

同じようなことを言った二人の言葉に俺は苦笑する。

「………何万円？ 桁が違いますか………個人的には千円以内に収めて欲しいんだが。これは二人の渾身のギャグだよな？ 結構面白いよ。」

「俺の全財産は一万円にも満たない。好きなだけ頼んでもいいが頼んだ瞬間お前らは食い逃げの共犯者になるぞ」

正確には八千八百九十五円だ。

「和磨君が私達を庇って一人だけ警察行きになる荒業はどうでしょうか？」

「和磨、グッジョブ！」

「グッジョブじゃねえ！ 認めるか、んなこと！」

全く、二人の発言が百パーセント冗談と言えないのが怖い。

「じゃあ私は期間限定の爽やか夏メイドとメイドリンク」

「あたしはこのにゃんデイ特別メニューとメイドリンク」

結局二人はジュースに加え期間限定とにゃんデイ特別メニューを頼んだ。これだけでも合わせて二千五百円以上もする。た、高い。

「俺はメイド水で……………」

俺はメニューで一番安い220円のメイド水を頼んだ。しかし、高い。ただの水で220円はぼったくられた気分だ。

「はい、以上でよろしいでしょうか？」

「うん、もうそれで良いから早く持ってきてくれるかな？」

これ以上仔那珂と御月に注文されたらたまったもんじゃない。だから早急にオーダーストップをお願いする。

「は、はい。分かりました」

彼女は頭を下げて直ぐに厨房へと走って行った。その後姿を見て俺は小さく呟いた。

「語尾忘れているぞ」

ははは、あの子はメイドに向いていないだろう。俺と同じでアニメも詳しく知らない非オタクなだから。でも良かったな、俺達が客で。彼女が今日みたいに常連さんのオーダーを取っていたら「何だ、そのメイドは！」って怒鳴られるのは間違いない。

「御月、彼女はいつからバイトを始めているんだ？」

「えーと、今日で一週間かな？ 六日間は厨房や裏側でサポートをして一週間目にして客前に出られるんだけど…………… ああ、じゃあ今日が初めて客に出る日だったみたい」

「大丈夫なのか、あの子？」

「分からない。らぶ メイは基本厳しいから解雇されることもある

と思う。らぶ　メイのバイト募集の規定ではアニメ、オタクの知識豊富な純正のオタクであるんだ。さっきの話だとそれ破っているわね。あの子」

赤の他人を心配していると、その張本人が三人の飲み物をおぼんに入れて持つてくる。今回はオーダーを取った人が持つてくるのか。「お待たせいたしました。メイドリンク二つとメイド水です」

親切に一つずつ置いたあと走つてまた厨房へと行く。俺が早く持つてこいと言つたのを真に受けすぎたようだ。

そして彼女の頑張りにより二分後には頼んだものが全てテーブルの上に乗った。にゃんデイ特別メニューは猫の形をしたオムライス。そして期間限定メニューは普通の冷やし中華だった。

「ではごゆっくり……………」

彼女は頭を下げ、再び厨房へと向か　わない？

黒髪ポニーの彼女はその場で立ち止まったまま下唇を噛んでいる。そんな行動に俺は質問せずにはいられなかった。

「ど、どうした？」

「……………」

黒髪ポニーの女の子は黙つてもじもじと手をいじっている。何か言いたいことがあるのだろうか？

不思議に思つてしているとポニーの女は御月の前へと立つ。

「どうしたの、唯？」

「あの、私もうすぐバイトが終わるんですけど……………」

「そうなの？　もしかして忙しいから急なバイトで入れとか？」

「違います……………そうじゃなく……………あの、これから皆さんは秋葉原をまた回るんですか？」

「そっだよー！」

元氣よく確言する御月。

……………やっぱりまだ秋葉原回るのか。そして俺は荷物持ちというのは確実か……………。

「でしたら……………私も連れて行ってください！　どうしてもこのバイ

トを続けたいんです（時給が高いから！）」

店中に響き渡るほど大きな声で訴える黒髪研修生。

「は？」「え？」「ん？」

そして三人はその彼女の発言に呆気にとられる。

急にどうしたと？

「え、と。唯、急にどうしたの？」

「私、オタク文化について何一つ知らないですし、知る為には色々勉強するべきとは思いますが一人ではとても自信がなくて……だから先輩に」

どうやら唯はこのバイトを続ける為にオタク文化を詳しく知りた
いようだ。でもこの文化は勉強というか趣味というか………学問と
いうのだろうか？ オタク学？

「うん、和磨君、仔那珂さんが良ければ」

「俺は別に構わない」

「あたしは反対どころか賛成ね。オタク文化に親しんでくれる人が
増えるのは光栄」

仔那珂は口調こそ上から目線だが嬉しさが隠せていない。

「うん、三人ともオツケーだから一緒に来てもいいよ。先輩として
唯にたくさんオタクの知識を教えてあげる」

「わー、ありがとうございます！」

無邪気に喜ぶ黒髪ポニーの女。

アニメもキャラ作りも好きじゃないのにバイトは続けたいのか。

「……よっぽど時給が高いんだな」

「唯、それじゃあバイトが終わったらこの席に来てね。私達はそれ
までここで待っているから」

「分かりましたー、本当にありがとうございます」

「お礼は教えてもらった後に言っただけ。唯」

「はい、分かりました。御月さん」

彼女はそう言って厨房へ向かう。その途中で一度振り向き会釈を
した。

「不器用なりに頑張っているな。あの子」

「確かに。でもあの子このバイトに向いていないんじゃないかな？
俺と仔那珂は冷静に黒髪ポニーを判断する。」

「唯は頑張り屋ではあるんだけど、オタク知識が皆無に近いよね
メイドリンクを飲みながら話すメイドの先輩御月。」

御月のドリンクよりも格下のメイド水を飲みながら俺は気になる
ことを聞く。

「そう言えば時給いくらなんだ、ここ？」

興味本位、それがどれだけ軽い行いか思い知らされる俺。

「聞きたい？」

「……ああ、まあな」

急に彼女の口ぶりが重くなったので俺はぞっとする。時給が禁句
？ そんなことは無いだろう。過半数の店は時給を公表している。

「教えてもいいけど。他言無用だよ。もし言ったら……」

彼女の偽りのない笑顔が逆に怖くなる。もしこれを聞いたら後戻
りできない。人生行路を踏み外す。そんな影が差す。

だから、超臆病者の俺は興味を捨てざるを得なかった。

「ごめんなさい、やっぱりいいです」

「あはは、それが良いと思うよ」

何故時給が守秘義務！？ 犯罪の匂いがするのが気のせいであっ
て欲しい。

御月の笑顔の表裏が激しそうで怖いな。家では包丁を研ぎながら『
ふふふ』と歌っているかもしれない。いや、それはホラー映画より
も怖いぞ。オタクの世界ではギャップ萌とか聞くけどこのギャップ
は怖い。学校では清涼に溢れる彼女が家では発狂者………想像で
きてしまう自分が怖い。

正直言つとこの職場の時給が気になる。でも聞けない。聞いてし
まったらどの選択肢を選んでも死亡フラグに転ぶような気がする。

はあ、話の指針を変えよう。もうバイトの時給の話はしない。命
は惜しいからな。

「そう言えばあの子……楽しそうにバイトしていなかったな」

オタクを隠したがる俺。メイド喫茶で働いているのにアニメやオタクに関して無知の研修生。どちらも似たようなものだ。俺は平々凡々な日常を求める為家族がオタクなことを隠している。そして彼女は時給が高いことに目を付けて好きでもないメイド喫茶で働く。どちらもオタクに良い印象は持っていないな。

そう言えば二人は何で二次元にはまったんだろう？ 何か理由があるはずだけど。

「二人は何で二次元に興味を持ったんだ？」

単純で悪意のない質問だったが、何故か俺は彼女達と目を合わす事が出来なかった。そんな俺は顔を少し右に逸らして聞いた。

彼女達の表情は見えない。そして長い沈黙が続く。

別に悪意のない質問をしたはずだ。でもこの沈黙は何だ？ もしかして俺はまた空気の読めない質問をしたのか？

KYの馬鹿だと自分を卑下し、下唇を噛んだと同時に仔那珂が口を開けた。

「あたしが最初に興味を持ったのは動画サイトのアニメ。元々あたしオタク嫌いだっただからアニメにも興味ゼロだったの。でもある時間違つてホームのおススメでアニメの欄を押してしまったの。その時に流れたのがショタアニメ。見る気は無かつただけで、感動の話でついつい最後まで見てしまったの。それからよ。興味を持ったのは」

「動画サイト？」

You t b eや二ニコ動画の類か…………。

そして仔那珂の話が終わり、メイドリンクを程よく唇に染み込ませた御月は口を開く。

「私も仔那珂さんと同様オタクに興味無かつた。その時の私は衣服や演劇に興味を持っていたの。でもファッション服を着て堂々と新宿を歩いたり出来ない。だから私は秋葉原のメイド喫茶を選んだ。キャラに成り切ることが出来る上に好きな服も着られる。一石二鳥

だったから。オタクに興味を持ったのはそれからかな？」

「二人とも家族や友達からは影響していないんだな」

俺はオタクでないが、影響されるとしたらあの非凡な家族からだろう。特に姉のBL好きは酷い。大学生になっても昼夜逆転生活を送っている。大学生ではなく墮異学生であると俺は定義しておこう。「ああそうか、和磨は家族全員がオタクなんだったわよね。でもそれはそれで楽しそうだけど」

くすつ、と仔那珂が微笑する。しかし、そんな甘い状況下ではないんだ。うちの家は。朝から晩まで騒音で寝付けないんだから。

「俺もオタクならどれだけ楽しかったか。二人の家族はオタクをどう思っているんだ？」

そう言えば聞いていなかったな。メールも二人とは少くないけど家族に触れたことはない。専らメールの内容はオタクの話。メールをする度に理解度が高まるのが最近の悩みだったりもする。

「う……………」

仔那珂は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「……………ああ、はは」

またKY質問をぶつけた俺は、頭をかきながら空気を重くしないようにわざとらしく笑う。しかし、あれだな。俺はKY決定だな。

そしてその気まずさの中、御月は口を開ける。

「私の家はどうだろう？ 私の家族ってふわふわしている人だから大丈夫かな。ああ、でも妹はオタクに対して毛嫌いしているかな」

ははは、と御月は笑っていたが俺はどう言葉を返していいかわからず頭をかいた。

「……………」

仔那珂は相変わらず口を閉じたままばつが悪い。

『お帰りなさいませ、ご主人様ニヤ』

『でへへ、可愛いコスでござるな』

『そう言われると照れるニヤ。ではご主人様、今からご案内させてもらつニヤ』

……沈黙の中、店の入口で聞こえる客とメイドさんの会話。
それが俺達の重い雰囲気にも更に錘を乗せた。

そして長い沈黙を破ったのは仔那珂だった。

「私の父と兄は議員を務めているんだ」

「……？」

首を傾げる俺。前置き無しに言われたその言葉を俺はどう捉えてよいか分からない。御月を一瞥したが同じく首を傾げていた。さっきの言葉から推理して分かるのは年の離れた兄がいるということぐらい。

そして俺と御月の反応に気にせず続ける仔那珂。

「議員さんでお母さんがサポートをしているんだ。で、あることに賛成したの。あたしにとつて最悪の賛成。そして兄と父にとっては私の趣味が最悪最低のもの」

「……？」

クエスチョンマークを俺は顔に何個も貼り付ける。

さっきから仔那珂は何を伝えたいんだろう？ 出来れば俺にも分かるように説明して欲しい。

「あ……仔那珂さん、もしかして秋葉原の……」

黙って頷く仔那珂。顔は笑っていないかった。

「それは……どうしようもないね」

解を聞き、御月は右手で右目を押さえ、慥然として溜息をついた。

「ちよっ……御月、自分だけ理解せずに俺にも分かるように説明してくれないか？」

「……仔那珂さん」

無表情で頷く仔那珂。やはりいつもの上から目線な笑いを見せてくれない。

「一度しか言わないからしっかりと聞いて和磨君」

強く首を縦に振る。そして緊張のせいかごくりと何かを飲む音が耳に響く。

「最近東京で賛否両論の議会が勃発している。オタク廃止制度の。」

秋葉原は電化街として元々有名だった。だから元の萌文化が無い綺麗な街に戻すってね」

ギリリと齒噛みする仔那珂と御月。

「……心の中で「賛成意見が増えて綺麗な秋葉原に戻って欲しい」と思ってしまった意見を俺は心の奥深くに押し込んだ。」

「私はオタクなので廃止制度に反対。けれど逆の意見が全て違うとは言いつれない。秋葉原では十八禁の物が点在している。そして十八歳以下の人が入っているのをよく見る。それだけで好ましくない。それに萌文化が増えてから二トが増えたのも否定出来ない。違う世界に逃げ込んで現実逃避しているだけかもしれない」

その言葉の後に御月が付け加える。

「そして、オタク廃止制度の賛成者が仔那珂さんのお兄さんと父親って訳」

仔那珂が下唇を強く噛む。そして眉間に皺を寄せて頂垂れていた。

「ああ、……そういうことか」

仔那珂自身はオタク。でもそれは議員でオタク廃止制度に賛成している父親と兄を裏切ることになる。もしオタクのことを訴えたのなら激怒では終わらないだろう。下手したら怪我を負うかもしれない。そういう狭間があったから彼女は自分の趣味を隠し通していたという訳か。

御月は言おうと思えば家族に話す事が出来る。でも仔那珂は家族を含めて誰にも言えない。この差は確実に大きい。

そしてその御月の言葉に仔那珂は熱くなり席を立つ。

「確かに御月の言うとおり不利益も多いよ。でも、それが無いと生きていけない人もいるの。あたしもその一人。だから廃止制度には許せない。あたし達にとって秋葉原の萌文化は支えになっているの。逆に萌文化が無いなら空虚な街よ」

仔那珂は冷静になって席に座り、そして頂垂れた。

同情は出来ない。簡単な話。俺はオタクではないからだ。

でも、彼女の寂寞は理解できた。俺は家族の中で唯一オタクでは

無い人間。逆に彼女はオタク嫌いの家族の中で唯一オタクの人間。俺達は似ているようで完全に違う。磁極で言うところのNとS。

「仔那珂は誰にも言えなかったのか。友達だけでなく家族までも」
「言えないどころか議員の親と兄には否定される。それはどれだけ辛いことだろうか。」

そんな現状に俺は聞かずにはいられなかった。

「もしも萌文化廃止論が賛成多数で秋葉原から萌文化が消えてしまつたらどうするんだ？」

「国が廃止と決めたらどうしようもないよ」
「頂垂れたまま答える仔那珂。」

「……………」

俺は何を言っているんだ？ 少し考えれば分かる答えだ。

国レベルで政策が取られたら誰が何を反論しようが関係ない。そして萌文化を廃止しようと論は出ても逆を出す人はいないだろう。萌文化は終わればもう復活しない。だから今を継続しなければ勢いが消えてしまう。

自分自身の問いに苛立ちを隠せないでいる俺。

そんな俺を余所に仔那珂は話を続けた。

「萌文化を禁止してしまつたら元の秋葉の姿が無くなる。それはもう分かっている。でもそんなの関係ない。あたしはアニメやシヨタフィギュアが死ぬほど好き。だからあたしは愛し続ける。例えばそれが確かな形で無くなつても」

仔那珂は自分のオタクに対する気持ちを全て出し切ったのか、胸を張り満足の笑みを見せた。

「うん、うん。私も気持ちは同じだよ。仔那珂さん」

御月はパチパチと拍手をする。

「泣ける、感動したです！」

「萌萌！ マジ感動レス。胸キュン来た」

「何これ、この演説神レベルきたを」

そしてそれを聞いた周りのお客さんもこちらを向いて盛大な拍手を

仔那珂に送った。

「ああ、どうも。どうも」

仔那珂は照れながら右手を頭の後ろに回し頭を皆に下げる。

「仔那珂……」

大きく口を開けて感心する俺。

これだけ熱意を向けられるのか……本当に凄いな。

そんな状況の中、黒髪ポニーの女の子が俺達から適度な距離を保つ。メイド服からボーイッシュな服装に変わっている。どうやらバイトが終わったらしい。

そして彼女は指で輪を作って口をパクパクしている。

「……………」

何か伝えたいんだろうか？ 金？ 違うよな。流石に初対面の人に金をせびることはしないだろう。まあ金に目が無いのは事実だろうが。

『マジ神っす。オタク姫』

『いやー、感動したレス。本当久しぶりに激シビ』

『泣けてきた。秋葉天使だを』

「ども、ども」

声援が続く店内。どうもオタクには仔那珂の名言にシビれたようである。

黒髪ポニーは指で輪を作ることと交互に手を胸の前で交差している。

「もしかして……今行ってもいいですか？ それともダメですかと伝えたいのか？」

そして俺は息を漏らす。

「はあ、そんなの口で言えよ」

手を上げて大きく輪を作る。つまりはオツケーという意味だ。

多分あいつはオタクという人種に慣れていないから場の空気が分らないのだろう。今行つていいのか、それとも今は行かない方がいいのか判別がつかないという具合か。

そして俺が大きく輪を作ると、彼女は胸に手を当て大きく息を吐く。もしかしてこれだけで緊張していたのか？ あいつは。

「バイト終わりました」

愛想笑いか緊張している笑いなのか分かりにくい笑顔を送る黒髪女。

「お疲れ、唯。ここに座って」

御月が後輩を優しく向かい入れ椅子を引く。

「わざわざすみません、御月さん」

「大丈夫。先輩だからね」

御月は照れ臭そうに胸を張った。

ははは、相変わらず後輩には強いな。

そして俺達も遅れてお疲れと口にする。

「「お疲れ」」

「いえいえ、わざわざそんな労いの言葉を貰わなくても」

両手を胸の前で振り、謙遜する彼女。

「いやいや、頑張ったと思うよ」

接客の出来は分からない。俺はオタクじゃないからメイドさんはこうあるべきと分からないんだ。

「そう言えば自己紹介がまだだったな。お前のことは何て呼べばいいんだ？」

俺の問いに黒髪ポニーはメイドスマイルを向ける。

「唯でお願いします」

それから俺達は、軽く唯と自己紹介を済ませ雑談した後はこの店を出た。

らぶが　メイから移動して最初に来ていた店に着く俺達。その間に秋葉のロッカーを経由して来たので俺の腕にはあの重い荷物が無くなって楽である。

更に楽という点を挙げるなら会計のこと。結局らぶ　メイではメイド水だけの金額を払って俺は後にした。二人とも「奢って貰う

のは冗談、冗談」とお金を支払ったのだ。本当は嬉しいはずなのだが何か俺は不甲斐無さを感じた。

「これは『ねんどろいど』って言う名のフィギュアなの」

「ねんどろいど?」

「ねんどろいど!! ちゃんと覚えないと制作会社に失礼!」

「はい、すみません。ねんどろおどですね」

「ねんどろいど!!」

「ああ、すみません(泣)」

御月は早速オタク知識を後輩に埋め込もうと頑張っている。そして後輩の唯はメモ帳を手にして必死に言われたことを書いている。

「ねんどろいど……」

「ねんどろいど!!」

「ああ、すみません(泣)」

記憶力と理解力には難ありだが頑張っている姿は眼で分かる。

そんな二人とは逆側に俺は立っていた。そして仔那珂は膝を曲げて棚に置かれているシヨタフィギュアに夢中になっていた。

改めて店内を見るとたくさんのおタクグッズで埋め尽くされている。フィギュア、アニメのDVD、ゲーム、漫画、小説、十八禁、コスプレ服、他にも多種揃っている。アニメイトやとらのあなの店と異なり中古のグッズが多いようだ。

「中古ね……」

置いてあったシヨタ系フィギュアを手に取り俺は眺める。

フィギュアケースには中古と書かれている。他のフィギュアを見ると新品や未開封と書かれている物があるが、中古と大して変わらない。新品に近い中古である。

しばらく眺めているとしゃがんでいる仔那珂が悪戯っぽく微笑む。

「どうしたの、和磨もシヨタに興味持ったの?」

「持っていない」

そう言っただけは元あった場所にフィギュアを戻した。

「あんたが今持っていたシヨタフィギュは昔から愛されているキャ

ラの将夢くん。本当に可愛いだよ。そのキャラ」

確かに可愛い顔をしているな……心なしか光河に似ている気がする。

それにしても本当に仔那珂はシヨタが好きだな。でもシヨタフィギュアは美少女フィギュアよりも少ないな。見る限りでは殆ど女の子のフィギュアだ。

「それに将夢くんはね」

仔那珂のシヨタについての熱意でまた話が長くなりそうだ。

そんな俺達を余所に萌知識を頑張って会得しようとする唯。

「唯、ねんどろいどについて質問ある？」

「はい、えーと……何でこれは小さいんですか？」

「可愛いからかな？ でもこれより小さい物もあるのよ。ねんどろいどは全長十センチ前後でねんどろいどぶちは全長六センチ前後。

やっぱり小さいフィギュアの方が可愛くて場所も取らなくて済むから好かれているの」

「ほうほう、参考になります」

唯は頷きながらメモを取っていく。

「他に質問はある？」

「はい！ あの、これは何で集める必要があるんですか？」

ピキッ、と何か割れる音がする。御月はわなわなと体を揺さぶり、唯の肩を両手で掴む。

「ひゃっ……」

「唯、その質問は愚問よ。フィギュアは集めるだけで価値があるのよ。分かった？」

御月は唯に顔の影が出来る距離まで顔を近づける。

「は……はい」

引き攣った愛想笑いを見せる唯。

「くれぐれもご主人様にさっきの質問をぶつけては駄目よ。その瞬間間違いないクリームが来るから」

「は……はい」

そして唯は御月との長話によりなんとかねんどろいどの知識を会得した。

同時刻、仔那珂のシヨタ話もピリオドをつけた。

「だから将夢くんは人気なのよ」

「はあ……………（長い！）」

長い、長い、長い、どれだけ熱意があるんだよ、お前は。

俺が溜息をつこうとすると肩を軽く叩かれる。

「ん？」

逆側にいた御月と唯がこちら側に回ってきていた。

「仔那珂さん、和磨君、フィギュアの説明は終わったよ」

「ふう、頑張つて覚えました」

実際はフィギュアの中でもねんどろいどだけ、だろ……………。

「で、次は何を教えるんだ？」

アニメ？ キャラクター？ 小説？ 漫画？ まあいずれにしても俺は何一つ教えることは出来ない。何一つ知識を持っていないか

らな。

「コスプレ」

…………… ああ、意外だった。てつきりメイドさんだからコスプレはもう既にクリアしていると勘違いしていた。

まあ、それも俺には関係ない。

「頑張れよ」

他人事のように俺は口にする。所詮俺は蚊帳の外だよ。

しかし、現実は違った。

まさか蚊帳の中だとは思っていなかった。

「和磨君、仔那珂さん、一緒にコスプレしましょう！」

「は？」

目を丸くして俺は三人をそれぞれ見る。

御月は眼を細めている。そして唯は照れながらもコスプレに反対

しない。そして仔那珂は「あたしも似合うかな」と眼を輝かしている。

「一つ聞かせてくれ？ 何でアニメや漫画と言ったものを通り越してコスプレ？ メイド喫茶でバイトしているからか？」

コスプレをする人の大半は好きなキャラに真似てみようと考えてる。だが唯はアニメを見ないし漫画も読まないらしい。だったら普通はキャラを好きになる為にアニメや漫画を先に教えるはず………どう考えても順序が逆だろ。

「唯は覚えるのが遅い」

「ん、ああそうだな」

「だからまずは好きになって貰おうと思って。コスプレ服を着て秋葉原の楽しさを体で覚えて欲しい」

「それが理由か………」

そもそもコスプレ服を着ただけで秋葉の楽しさが分かるのかと言いたかったが、敢えて口にはしない。

「うん」

「お前馬鹿か？」

「馬鹿じゃないよ」

「何で俺まで参加しなくちゃいけない？ 嫌に決まっているだろ」
別に御月と唯でコスプレをすれば解決する話じゃないか。別に俺までコスプレしなくても。

と俺が口を尖らせて言う。と仔那珂は屈託のない笑顔を見せる。

「皆でコスプレした方が楽しいじゃん。って言ってもあたしはコスプレしたことないんだけどね。でもコスプレしたいとは思っていた」
「和磨君、唯の為と思ってお願い」

御月は手を合わせてお願いする。そして唯も野球部のように元気よく「お願いします」と頭を下げる。

……断れない雰囲気。でもこれを承諾したら非オタクと自信を持って公言出来ない。間違いない。そして確実に街部や末代にバシたらオタク扱いされるだろうな。

でも、まあ今回は唯の為。唯の為。

「分かった。今回だけだからな」

その言葉が出た瞬間に三人の表情が和らいだ。

「わー、ありがとう。和磨君」

「ありがとうございます」

「和磨ならやってくれると思っていたわよ」

三人が喜んでくれるならそれもアリかな。でもコスプレって何を着るんだろうか？ 目も当てられない服装だけは嫌だな。それにコスプレって似合わない人はとことん似合わないんだよ。弟はコスプレが似合うけど姉と母は至って普通。……親父がアイドル服を着て歌っていた時は吐き気が止まらなかった。胸毛と生足を露出し踊っていたんだからな。そして一曲踊り終わる前にコスチュームがビリッと全壊。

「あれは無いわ……………」

今でも鮮明に覚えてしまっているあの醜いボディ。

午後三時二十分、俺は親父の二の舞だけは踏まないと心中で誓った。

五分程度歩き秋葉原のとある店に入った俺は、まず店の中に知り合いがいないかを確認する。もしいれば場所替えをすることは仔那珂と御月と取り決めている。

店には知り合いの姿は無くぽつぽつと人影があるだけ。俺の学校にはオタクは多いけどコスプレイヤーは案外少ない。だからいつもよりは安心して店内を回れそうだ。

「……………」

唯を除く三人は安堵の息を漏らす。

店内はコスプレ服が何列にも並んで掛けてある。可愛い服から『え？』と目も当てられない服が掛けてある。そして試着室も一列に長く並んでいる。

これは様々なバリエーションがあって面白そう……………かもしれない

な（俺除く）。

「早速皆着替えよう。二十五分後の四時までに自分が似合うと思うコスプレ服を選んで試着室に入つて。そして皆が着替えたら一斉に試着室から出る。それと着替えるまでは皆に見せたら駄目だから。ネタばれは禁止行為。時間厳守だからよろしく」

「分かった」「はい」「……………」

メイドさん代表の御月が口になると、俺達三人はそれぞれ固有の返事をしてコスプレ服を選ぶ為にばらけた。

「蓮見さん、さっき何で店内を見回していたんですか？」

コスプレ選びが始まった瞬間、唯は横にいた俺に聞く。

「実は俺達隠れオタクで…………いや、俺はオタクじゃないんだけど。

まあ説明が面倒だからオタクでいいや。とにかく秋葉では知り合いには会いたくないんだ」

「そうなんですか？」

「そうなんですかって…………唯はオタクと思われても平気なのか？」

隠れオタクの逆にペラペラとオタクと公言する人もいる。唯は後者か…………。

「はい、平気です。別に友達もいませんから気にしませんよ」

「へ！？」

思わず裏声が出てしまう俺。

友達がいない……………やっべ

また地雷踏んだ。

しかし俺の心配とは裏腹に、凜とした表情のままコスプレ服を見て回る唯。

「おい、ちょっと待てー！ 何でそんなに平気な顔！？ 今さっき友達がいないって言ったんだよな？」

「はい」

唯は頷く。

寂しい表情は見せず、我慢しているようにも見えない。

言葉が浮かばずに上を向く。

「蓮見さん、私別に寂しくありませんよ。今まで生まれて来て友達を欲しいと思ったことはありません。楽しい孤独ですよ。」

彼女は寂しがるところか喜々して会話する。杞憂で終わったと考えるべきか俺の心配は無駄になった。

「……………でも友達が欲しくないって言っているのに俺達と一緒に行動しているって……………矛盾してないか？」

「友達欲しくないんだよな？」

「はい」

彼女は頷く。表情は堅くもなければ柔らかくもない。素の表情。

「じゃあさ、俺達と行動していいのか？ これは友達じゃないのか？」

「違いますよ。蓮見さん、御月さん、十朱さんは先輩じゃないですか。先輩は大きな宝です。私よりも幾分人生が長いですし（それに奢ってもらえるし）」

幾分って一年かそこらだろ。唯が何歳か知らないけど。

「それに友達を持ってても徳はありませんよ。友が出来たら遊びで時間の浪費が目立ちます。逆に先輩方と一緒に活動していたら有意義に時間を使えると思っています」

「……………有意義ねえ……………唯、自己紹介の時に聞いてなかったけどお前何歳？」

「十六の高校二年生です」

「……………同年齢じゃねえか。」

多分唯は御月が職場の先輩だから同級生と思えなかったのだろう。でも現実と同年齢。同じように高校二年生をエンジョイしている学生だ。

「これはどうすれば？ 正直に教えてあげるべきか？ 俺もお前と同じ年齢だって。そして君の先輩の御月も同年齢と。」

「ふう……………」

「ここはストレートに同年齢と言わずに一度柵を置こう。」

「あのお、御月は何歳に見える？」

先輩と思っっているぐらいだから十七か十八と答えそうだが……。

「二十歳かな？ 御月さん大人っぽいけど年齢は若いと思います」

「二十歳を若いとするならば実際に見える顔年齢はもっと上。」

「合っていますか？」

「……………この質問をした俺が悪かったよ。」

「俺達三人ともが十六って言ったら驚くか？」

「蓮見さん、つまらない冗談は止めてください」

「純粋な笑顔をする唯。その笑顔が俺の胸に鞭打つ。」

「……………本当だ」

「……………フィクションでは？」

「ない」

「冗談では」

「ない」

「……………嘘お……………」

「彼女はおちよぼ口で嘘、嘘、と青ざめ三人を見る。」

「まさか同じ高校二年生だったとは……………」

「失礼だぞ」

「そういう意味では無く大人っぽいからとても同年代には見えなかつたんです」

「彼女は何度も俺達を見比べる。そして顎に手を置き悩んでいた。」

「唯は幼顔。御月は大人っぽい雰囲気醸し出している。確かに年齢の誤差はあるが四歳の差は酷いよな……………」。

「で、どうするんだ？」

「はい？」

「俺達は同年齢だったんだろ。御月は職場の先輩だから良いとして俺達とはどういう関係になるんだ？ 友達を作りたくないんだよな……………」

「個人的には友達になりたいのだが、相手の気持ちを尊重する方が大事と俺は考える。」

「そうですね。自分の考えを変える気はありませんが、今日だけお

試し期間で友達を持ってみようと思います」

「そいつは良いことだな。案外お試し期間の友達が気に入るかもしれないぞ」

「逆ですね。友達がいらなことが分かると思います」

友達 unnecessary の気持ちは変わらない面持ちの唯。

ははっ、相変わらずだな。

「お試し期間か……………」

「はい、そうです」

顔を顰める俺。お試し期間と聞いて不愉快を感じずにはいられなかった。

「唯、お試し期間なら敬語は止めても良いんじゃないか？」

友達に対して敬語を使うのは、他人行儀、敬遠と言ったように慣れ親しんでいない。

「そうですか……………じゃあタメ口で話してみようと思います」

彼女は難しく眉を顰め、咳払いをした。

「よう蓮見、しけた顔してんなあ、ホントに」

「唯、それは違う。タメというより上から目線。それと男子キャラがもう一人増えたと勘違いされるからその口調は止めてくれ」

「これじゃダメですか……………」

彼女はしょんぼりと肩を竦める。

唯は唯なりに頑張っている。ただタメ口を使うのは慣れていないようだ。それも当然。今までこいつは友達を作ったことが皆無。どう接したら良いかも分かるはずがない。

「やっぱり私には敬語の方が楽です」

「そうだな」

無理に急ぎ足にさせなくても良い。こいつにはこいつの一步の速さがあり俺が決めることではない。だから好きにさせてやるう。

「じゃあそろそろコスプレ服を選ぶか。唯」

「そうですね。と言っても残り七分しかありませんけど。着替える時間も合わせればもっと短くなります」

「え!？」

顔を青くして携帯電話を開く。待ち受けには三時五十三分と右上に表示されている。

まさかこんなに時間が過ぎるのが速いとは……………。

「つていうか俺まだコスプレ服一着も見てない!」

恥ずかしくなく、シンプルで格好いい服。それを探す為にはとても五分では間に合わない。

「私はもう決まりました! 決めたコースは五番の試着室に入れ、いつでも着替えられる準備をしています」

「いつのまに!？」

俺とずっと話していたのにいつのまにコスプレ服を決めたんだ? もしや店に入って即着る服を決めたのか? いや、それは流石に

……………。

しかし、どうしたのか……………七分の間に決めた服を着ないと時間を破ったKYになってしまふ。速攻で決めないと。

「出来ればけど……………コスプレ服探すのを手伝ってくれないか?

もうお前は終わっているんだろう? 俺コスプレ初めてだからど

んな服が良いか分からなくてさ」

「私も初めてですけど。メイド服以外では」

「女子の方がセンスはあるだろ」

少し反則な気もするが、目も当てられない服を着るよりはずっとマシだろう。

「分かりました。選びます。というより私最初から蓮見さんに似合う服を目に付けていたんですよ。だから一応試着室に入れてあります。蓮見さんが着て御月さんや仔那珂さんが絶対に喜ぶ服をね」

「本当か!? 助かった」

最初から目に付けていたということは、それなりに似合う服なのだろう。これは期待大だ。でも御月と仔那珂が喜ぶ服って何だろう? そんな服本当にあるのか?

「ただし」

「ただし？」

しかし、そんなに簡単に上手い話が進むわけがない。こんな話には条件が加わってくる。

「私が選んだ服には文句を言わないで下さい」

「それは勿論」

俺は大きく首を縦に振る。

選んでもらってにおいて文句を言う人間は最低だ。俺は間違ってもそんなことはしない。

「そしてもう一つ」

「まだあるのか？」

俺は焦燥混じりに溜息をする。

もう一つが無茶な条件じゃなければいいが

「蓮見さんの着替えは私に任せてください」

.....
彼女は何を言っているんだろう？

.....

「は？ どゆこと？」

口をへの字に曲げ眉を顰める俺。

彼女が何を伝えたいかさっぱり分からない。

「だから蓮見さんの着替えは私に任せてください」
笑顔でとんでもないことを口走る唯。

「何言っているんだ？ 一人で着替えられるよ！」

急にどうした？ もしかして俺に気があるのか？ いや、今日初

見の唯が俺を好きになることは無いだろう。だったら何で？

「いや、私が選んだ服を蓮見さんに見られたくないんですよ」

「はい？ 何で？」

唯はさつきから何を言っているんだ？

「サプライズですよ。サプライズ。だから私が目を開けていいですよ。と言つまで目を閉じてください。絶対に！」

「待て待て待て待て！ ウエイウエイウエイ！ 勝手に話を進める

な！ 俺がいつ承諾した！ それに着替えとなると俺は上半身裸になつてパンツ姿にもなるんだぞ！ そんな姿女に見せられるか！ 恥ずかしくないのかよ！」

両手を前に出して必死で説得する俺。

「……………こいつデリカシーという言葉を全く分かっていないな。

しかし説得に対して唯はさらつと答えた。

「大丈夫です。男の人に興味ありませんから」

「興味無くてもダメ！」

胸の前で手を交差させxを作る。

「……………蓮見さんと私は友達じゃないですか」

「思い出したように言うな！」

今日だけお試し期間と言っていたくせに都合が良いこと言いやがって。

もう何を言っても無駄と思つたのか彼女は俺から遠ざかろうとする。

「おい唯、どこに行くんだ？」

「え？ いや、もう着替えに行こうかと。話している間に残り五分になりましたし」

「なぬっ!？」

さつき会話をしている間に二分も経つたのか……………これじゃあコスプレ服を探す時間もない。

ぐぐぐ……………仕方ない……………。

「唯、お前に……………着替えを任せる」

下唇を噛み俺は苦渋の決断をする。

「本当ですか？」

「あ……………ああ……………」

その決断に彼女は向日葵の笑顔を俺に向ける。

唯はよっぽど嬉しかったようだ。何で？ そこまで俺に気に入った服を着せたいのか？ それとも俺に気が？ ……………それは俺の行き過ぎた勘違い……………とにかく今は彼女の言うとおり進めるしかないな。

「では時間もないのでダッシュで試着室五番に入ってください。お客様ももう私達以外に殆どいませんから。試着室が開いていると思います」

「……分かった」

小さく頷く俺。

……何かこの展開に誘導された気分だ。

そして俺達は全速力で試着室五番へと入る。試着室に入る時に二人にばれてしまうと心配もしたが杞憂で終わった。試着室の前に置かれている靴を見て分かるように、二人とも着替え中のようなのだ。

「狭いな……」

「こんなものですよ。というより目を閉じていてください。約束違反ですよ」

「ああ」

唯に言われ両目を閉じる俺。しかし、どうしても気になって薄目で中の様子を確認する。

試着室は狭い。中にあるものは一時的に着替えた下着や衣服を置くバスケット。そして全身を写すミラーが取り付けられていた。そして試着室の狭い絨毯には二つの紙袋が置かれている。

薄目を開けていると、爪先立ちをした唯と目が合う。

「蓮見さん、目を開けないでください。もし次目を開けているのを見つけたら婦女暴行で訴えますよ」

「待て、それは冗談で済まなくなる。警察沙汰は勘弁してくれ」

「じゃあ目を閉じてください」

「分かりました」

警察沙汰だけはこれからの人生に関わってくるので俺は眼を強く閉じた。さっき見ていたでしょうと疑惑を持たれた時点で俺の人生は塵に変わる。

シウルシウル、シウルシウル、ガバツ、

服を脱ぐ音が聞こえる。しかしまだ俺は服を脱がされていない。

御月と仔那珂が着替える音も聞こえないだろうし………となるとこ

の脱ぐ音は唯!?

目を閉じたまま俺は唯に問う。

「唯、着替えているのか?」

「はい」

「何で? ここで着替えなくても良いだろ」

「時間の節約です」

彼女はそう口にした後、俺の質問に一切答えなかった。

シユルシユル、シユルルルル、バツ シユルシユル カチ

ツ シユルシユル、シユルルルル、バツ、ガバツ シユルルル

狭い部屋。彼女の吐息が自分の吐いた息と重なる距離。人肌で温められた温度。たまに触れてしまう彼女の体。そして仄かに匂う彼女の石鹸の匂いと汗のにおいが混ざったもの。それら全てが俺の鼓動の音と速さの振り幅を大きくしていく。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン

服の鼓動が聞こえる。まるでその音は生きているかのような音を発し、時間とともに音が大きくなる。そして自分の心臓の鼓動と服の鼓動が重なる。

……… って俺は変態か?

全く、服を擬人法のように捉えて俺はいつから服萌に走ったんだ。でも、今日を開けば彼女の姿が……… っていかん、いかん……… でもここは健全なる男子高校生として見ておくべきじゃないか

………、
そして、我慢の沸点も超え、目を開けようとした時に掛かる声。

「私の着替えは終わりました。次は蓮見さんのお着替えです」

「………はい」

見られませんでした。はい。

そして次は俺の服が女の子の手によって脱がされていく。

ガバツ、シユルシユルルルル　シユルシユル、ガバガバツ、シ
ユルシユル　シユルルル、ガバツ、シユルルルル

どうして男の人と女の人で脱ぐ音の魅了さが変わってくるんだろ
う。

「では両手を上げてください」

黙って両腕を上げる俺。

それにしても……………スポンを脱がされ、上半身を脱がされ、そ
して服を穿かされる。

非常に気まずい。この空気誰がどの方向に持って行ったら収束が
つくんだろうな？ いや、もう収束不可能かもしれないな。

緊張と恥ずかしさにより汗が大量に出て目に汗が入る。しかし目
を開けられない為、俺は眼を閉じたまま汗を我慢する。

「蓮見さん、すみません。つけ睫毛をつけるんで動かないで下さい
ね」

……………了解「

……………ん？

つけ睫毛？

つけ睫毛！？

何でコスプレに必要なの？ 本当に格好良くしてくれるんだろ
うな？ いや、さっきの声は幻聴だ。気にしない方向で行く。目の
辺りがむずむずするけど気にしない方向で行く。

「化粧するんで動かないで下さい」

……………了解「

………は？

化粧？

化粧！？

さつきから唯は何を言っているんだ？ 二回目は幻聴で片付けられないぞ。

パフパフと顔のまわりを何かで軽く叩かれる。これは何をしているんだ？

……… 本当に大丈夫だろうか？

そして待つこといくらかで俺の服装が完了した。その数秒後に左と右の部屋から声が掛かる。

「唯、準備出来た？」

「はい、出来ました御月さん」

「和磨、あんた準備出来たの？」

「あ、ああ………」

自信なく弱々しい声で仔那珂に返事する俺。

そっすだよ。………心の準備以外は全て出来た。そう、ここの準備以外。

緊張と焦りと不安の三要素が俺の体に異常をきたす。尋常じゃない汗が額、脇、腕から滝のように出てくる。

何だ？俺コスプレでこんなに緊張しているのか？

「じゃあ一斉のーで、で皆一緒に出て行ってね」

御月が少々高めの声で皆に言う。コスプレをして気分が舞い上がっているようだ。

御月の言葉に三人はそれぞれ返事をする。仔那珂は景気よく。唯は素の様子。そして俺は不安、緊張、焦りの三要素に声が乏しい。

「分かった」「はい」「(………はい)」

そして今俺は旅立つ。

「一斉のーで」「」

試着室のカーテンを開け、床に足をつけた刹那、左と右から俺の腕が抱き寄せられる。俺に抱きついたのは御月と仔那珂。

「え？ は？」

鼓動の音が高まるのが分かる。そして驚きに汗が一瞬で引き、全身が凍りついてしまった。

何？ 何で？ 何このリア充的展開は？ そんなに俺のコーディネートが上手だったのか？ そうだったら唯、お前良い仕事したよ。「きゃー、可愛い」「最高にプリティー」

……可愛い？ プリティー？ ピンクを基調とした服でも着させられたか？

「唯、目を開けてもいいか？」

……嫌な予感がしてきたぞ。

「あははは、良いですよ。ふふふ」

唯は笑いを堪えられずに笑い入る。

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクドクドクドク

緊張と不安が復活して心臓の鼓動が速くなっていく。

ゆっくりと、ゆっくりと、恐る恐る目を開く。

目を開けて左と右を見る。

「……………御月、仔那珂」

左から御月、右から仔那珂が俺の腕に抱きついていて。最初は何かの冗談と思っていたが幻覚では無いようだ。御月は胸元が開いた白い天使のコス。仔那珂は初ミクのようなコスプレをしている。二人ともよく似合って可愛い恰好だ。

そして振り返って唯を見ると、俺を見てまだ笑い入っていた。

唯のコスプレは……………というよりこいつ……………らぶ。メイのメイド服着てやがる。だから選ぶのに時間が掛からなかったのか。納得だ。二人に密着されるとトマトのように顔が赤くなる。そして思う。これが夢ならば早く夢を見させて下さいと。

そして頬を赤めつつ、近くに鏡があったので俺は自分の姿を確認

する。

まずは俺の姿の両手を見る。左手には黒猫の手袋。右手には白猫の手袋が付けられている。そう、黒白の猫手の手袋をつけている。

次に足を見る。スリッパはもふもふの羊のような素材。そして黒白の長靴下サイハイソックスを履いている。

最後にズボンと服、その他を見る。しかし、俺が穿いていたのはズボンではなく赤のタータンチェックのミニスカート。服は赤と白を基調とした物で胸元に赤のタータンのリボンが付いている。頭にはでっかいピンクリボンと猫耳がついている。更に化粧をして長い睫を付けて本物の女の子のようであった。

自分で自分の姿を見た瞬間、顔の火照りは紺碧の表情へと変わる。

「……唯」

「ふふふ、あはは、何ですか？」

背中を丸め笑入っている唯。ツボに入っているらしい。

「何これ？」

両手につけている猫手。もふもふ羊のスリッパ。黒白のサイハイソックス。赤のタータンチェックのミニスカ。そしてピンクリボンと猫耳。これら全てが男らしい格好良さから遠ざかっている。

「蓮見さん可愛いですよ。それに良かったじゃないですか。二人に気に入られて」

反省の色無しで笑い続けるコーディネーター。

その一言で二人ははつと我に返り、腕に抱きよせていた手を離す。「いや、これはつい和磨君が可愛くて」「うんうん。別に和磨を気に入った訳じゃないわよ」

二人は顔を真っ赤にしている。今になって抱きついた恥ずかしさ

が戻ってきたんだろう。

「……………はあ」

肩を落として脱力して床に手をつける。

ついに女装してしまった……………はあ、結局二人は俺が好きなんじやなくて女装した姿が好きってことね……………全然嬉しくないです。でも唯との約束事でどんな服でも文句を言わないと誓ったから何も言えないな。

俺が落ち込んでいると二人はフォロー(?)してくる。

「和磨、そんなに落ち込まないでよ。とても似合っていたわよ。光河くんと同じくあんな女装の才能あるって。だから元気出して」

「和磨君、とても似合っていたよ。あの姿なららぶ。メイの人気メイドに君臨すること間違いなし！だから元気出してよ」

二人は多分元気づけようと声を掛けてくれている。しかし、その言葉により俺は更に深い溜息をつく。

「はあ……………」

これで俺は本当に非オタクと言い張れるのか？ 自信なくなってきたよ。

そんな俺を見て唯が近寄る。

「蓮見さん、今日の女装は完璧でした。私が見込んだだけはありませんよ」

「お前な……………全く」

こいつは全然反省していないな。

「どうだ、コスプレは楽しかったか？」

まあ、こいつが楽しければ結果オーライだろ。

「そうですね。楽しかったです」

「そいつは良かったな」

そして彼女は口にした。

「だから……………お試し期間の延長をお願いします」

彼女はにっこりと微笑みかける。

「唯……………」

彼女がお礼を言った刹那、俺は怒りの感情よりも安心感が高まった。友達には必要ない。いても不になるだけと言っていた彼女が改心したのは俺にとって吉報だった。でもオタクの素晴らしさを俺から学んだのは語弊だぞ。俺は非オタクなんだ。

どちらにしても彼女の改心には口元が思わずにやけてしまう。

「これからもたくさん遊ぼうな」

「はい、次も違うコスを私が選んでおきます」

「それは止めてくれ」

「えー」とつまらなさそうに唯は不満の語を漏らす。当然これからは女装する気は一切ない。俺はオタクでも無ければコスプレイヤでもないんだ。

そして唯は俺にお礼を言った後、二人にも頭を下げる。

「御月さん、十朱さん、今日は本当に有意義な一日を遅れました。

これからもよろしくお願いします」

「うん。バイトでも頑張つてね」

「はい」

「勿論よ。今日が初対面だったけどとても楽に話せた。また遊びましょう」

「はい」

そしてムードが良い方向へと進んでいき、コスプレ服を元ある場所に戻した俺達は気持ちよく店を出ようとした。

が、

仔那珂のある疑問で雰囲気はぶち壊れてしまう。

「そう言えばさ、何で唯と和磨は一緒に試着室から出てきたの？」

「ああ、それ私も気になっていた」

二人は不思議そうに首を傾げる。

「……………」
その疑問が出て数秒後、俺は手が汗ばみ、口がからからに乾燥する。

唯を一瞥する。すると唯は言い訳をしると目で訴える。

……そうだよな。自然な感じで誤魔化すしかないな。

「それはあれだ。えーと……」

弁解の語が頭に浮かばない俺。どう言い訳をしても逆効果。選んだコスプレ服を見てもらおうと思った、ではルール違反とされる。だったらどう言い訳を？ よし、ここは二次元の言い訳で乗り切ろう。オタクの二人ならこれで流してくれるはず。

「着替えている途中にワープしちゃった」

お茶目な様子を最大に出してウィンクする。

しかし、オタクの方も現実は見えているようだ。

「何言ってるの、あんた？ わーぷ？ 馬鹿じゃないの？」

「和磨君、そんなこと言ってる恥ずかしくないの？ ワープなんて非科学的なことは現実で起こらないよ」

仔那珂は塵虫を見る目。御月は黒い笑顔。

それならここはこれで乗り切るしかない。

「こんな質問に答えていたら唯の為の秋葉時間が短くなる。だからさっさと秋葉巡りに行こう！」

ぎこちない笑顔をして二人に説得する。これは言い訳の施しが効かない。だったら話を流して忘れてもらおうしかないだろう。

そして俺と目があつた唯は右手拳を上にあげる。

「そうですね。行きましよう。行きましよう」

その言葉で二人は折れ、同意する。

「そうね、唯の為の時間が勿体無いものね。でも……うーん」

「むっ、和磨……」

しかし、二人はまだ疑っているのか不満の顔を出し続けた。

太陽が沈み始め紅に染める頃、俺は重い足を棒のようにして帰っていた。

「ふう、今日は色々と疲れたな……」

あれから俺達は秋葉原の店を転々と紹介し続けた。疲労は溜まっ

だが試着室の件を言及されなかったのは不幸中の幸いだ。

自宅が見え始めた頃、俺は後ろから声を掛けられる。

「和磨！」

声の主を見る為、体ごと振り返る。

「仔、仔那珂……………どうしたんだ？」

振り返るとグッズの袋を片手に持った仔那珂が後ろにいた。

まさか、唯への秋葉紹介が終わったからって試着室の件を聞きに来たのか？

「あのさ……………用があるんだけど」

頬を紅潮させた仔那珂はやや下を向き話しかける。

そんな彼女の言動に対して俺は直ぐに頭を下げた。

「ご、ごめんなさい」

「は？ いや、何で謝るの？」

首を傾げる仔那珂。

「え？ 違うの？ 唯から何も聞かなかったのか？」

「う、うん……………」

「じゃあ何の用だ？」

「え、えつとね……………」

言葉を洩る仔那珂。何か言いづらいことでもあるのだろうか？

「仔那珂、どうしたんだ、こんな所で？」

仔那珂が言い渋っていると、俺の後ろから爽やかな青年の声がかかる。

顔を上げると仔那珂は眼を皿にして口にする。

「お……………お兄ちゃん……………」

「そつだよ。どうしたんだ？ こんな所で？」

振り返ってみると長身の爽やかイケメンボーイが立っていた。確か議員さんだったっけ？ でも仔那珂からは苦手意識を持たれていない人だよな。

それにしても仔那珂がお兄ちゃんって呼ぶなんて新鮮だな。

「あなたは誰ですか？ もしかして彼氏？」

先に質問される俺。そしてその答えも自分より先に仔那珂が答える。

「違つよ、お兄ちゃん。その人はクラスメートの子」

「ははは、それは失礼。初めまして僕の名前は十朱修一です」

「ああ、ども。蓮見和磨です」

萎縮しながらも握手を交わす。

「それよりもどうしたの、お兄ちゃん？」

ぎこちない笑顔を向け、震える言葉を口から発する。

「ちよつと議会の方針だね。各地に挨拶に行つていたんだよ。議員はたくさんの地域に行かなくては務まらないからね」

「ああ……………そうなの」

彼女はぎこちない笑顔を続ける。平生を保ち続けようとするが明らかに言動がおかしい。

「それよりも偶然会つたんだ。お兄ちゃんと一緒に帰ろう。もう暗くなるからね」

「いや……………もうちよつと友達と話していたいし」

「仔那珂、これ以上暗くなつたら危ない。だからお兄ちゃんの言うことを聞きなさい。荷物も持つてあげるから」

そして荷物へと手を伸ばすお兄さん。

「ダメっ！」

彼女が手を振り払おうとして荷物が地面へと散乱する。

「こらこら荷物に傷がつくだろ……………え？ 何だ、これ」

お兄さんは落ちたゲームソフトを手に取る。普通だつたら荷物を袋に戻すのだろうが、お兄さんは袋に戻さずに地面へと再び置いた。その行動に至つた理由は簡単。議員のお兄さんはオタク文化撲滅に表明してオタクが大嫌いだからである。

「……………」

そのお兄さんに俺達二人は言葉が出ず、項垂れることしか出来ない。

するとお兄さんは、砂埃が付着したゲームソフトをまた手に取り、

仔那珂の目の前に立ち見せる。

「仔那珂、これは何だ？ BLパラダイス、BL大衆、ムキシヨタ3・5番外編、これら全て何だ？ 何を買っているんだ、お前は？」

「……………」
一つずつ手に取り、また所定の位置に戻すお兄さん。お兄さんは声を上げず表情は怒りに満ちていた。

そんなお兄さんの問いに仔那珂は黙って下唇を噛んでいた。

「仔那珂、黙っていないで答えなさい」

怒りに満ちた小さい声が仔那珂に掛かる。仔那珂はまたしても質問に答えない。

「ふう……………仕方ない。君は何か知っているかい？ 和磨君？」

「……………」
無言で俺は何も答ええない。というより答えられなかった。お兄さんの眼力は凄く俺に喋らせる権利さえ奪ってしまった。

「まあいいや。他人にまで家庭を持ち込めるのは得策では無いな。

それによくよく考えれば仔那珂の持っていた袋からこれらが出てきた。これは仔那珂のだろうな。仔那珂いい加減話せよ」

「……………」
長い沈黙が続く。いや、実際は短かったのかもしれない。しかしその時間は永遠にも感じられるほど長かった。

そして沈黙を破ったのはやはりお兄さんだった。

「がっかりの言葉に尽きるな。兄をやってきて今までで一番お前に落胆させられた」

お兄さんが心に突き刺さる発言をする。言われた本人の仔那珂は目を強く瞑り、必死で拳を固め、歯を食いしばっている。

しかし、そんな妹の様子に関係なく話を続けるお兄さん。

「仔那珂、お前は本当に愚妹だ。謙った言い方でなく、本当に愚かな妹。何で分らないかな？ 兄と父が議員でオタク文化を消そうとしているのにそれに反発したようにオタクになるとは最悪だ」
「うう……うう……」

彼女は必死で我慢をする。お兄さんの言葉の途中に漏れている声は聞いていて気分が優れなかった。

「二次元に執拗して馬鹿なのか、お前もあいつらも？ ただの絵じゃないか。そんな物に何の魅力がある？ そしてああいう馬鹿共が罪を犯し人の道に反した行動ばかり取る。お前も同じだよ。仔那珂。本当に失望した。他にもたくさんあるぞ」

お兄さんはまだまだオタクへの批判を続けようとする。

この話は俺に関係ない。何故なら俺は彼女と違いオタクでないから。逆にこれは良い機会なのかもしれない。無関係の態度を取り続けてもうオタクとは縁のない生活を送ることが出来る。元の生活に戻れるかもしれないだ。

彼女は見ると目を強く瞑っていた。しかし、涙を止めることは出来ずに地面へと大粒の涙が零れていく。

学校では傲慢でいつも強気な彼女が涙を流している。

あのいつも強気な彼女が。泣いている。

でも知ったことが。俺には関係がない。関係がないんだ！

「黙れ！ もうそれ以上口にするな、ゴミ野郎！」

『関係ない』そう思っている頭とは違い口と体が勝手に動いていた。

「んなっ……き、君には何一つ関係のない話だろ」

「関係ないか……じゃあお前には何の関係があるんだよ」

「なっ、お前だと……僕はこれに大いに関係がある。僕はこのオタク文化廃止に議員として賛成の意を表明しているんだから」

「えっ、何だっ？ あんた議員さんだったのか！？」

敢えて驚いた表情を見せる俺。実際このお兄さんが議員さんだとは仔那珂にも聞いています。だが今は知らないフリをする方が得策だろう。仔那珂がお兄さんのことをペラペラと話したと知ったら面倒なことになる。

「そう言う訳だからこのゲームは没収させてもらおうよ」

お兄さんは一つ一つ袋に落ちていくゲームを入れていく。

「いや……………や……………」

仔那珂は声を押し殺していたが漏れてしまう。そりゃそうだよな。大事な物だったんだから。あの中にはプレミアなものも入っている。何よりもあれは今日の思いでの結晶だ。あれが無くなってしまったら今日の全てが弾けて無くなってしまおう。

さて、ここが分岐点だ。

どうする俺？

どうするって……………既に答えは出ているよな。

当たり前だ。

女の子泣かせてまで非オタクを語っても何の価値も無い。

でもこのお兄さん、議員さんだから引込みようにならない。議員は例え自分の意見が間違ってもその時は変えようとしなない。だからそのゲームを残す手段はこれしかない。

「お兄さん、さっきから何を言っているんですか？」

「は？ だからこれらのゲームやグッズを全て処分すると言っているんだ」

お兄さんは正しい。100%正しい。仔那珂のことをどう言おうがこれらを捨てる判断は変わらないだろうな。

先に謝っておく。すみません、お兄さん。この嘘だけはお兄さんにも自分自身にも使いたくなかった手段なんだ。

「お兄さん、さっきから何言ってるの？ 何で俺のゲーム捨てられなくちゃいけないんだよ？」

「はあ？ 何を言っているんだ？ これは仔那珂の物だろう？」

お兄さんは頭に疑問符を何個も浮かべ困惑している。

「はあ、近寄るな。近寄るな。このホモ野郎」

お兄さんは地面に背中をつき俺が密着する。大変汚い絵面である。
「お兄さん、もしもオタク文化廃止が決定したら、俺とホモ仲間が全員お兄さんを奪いにいきますから」

顔を近づけると、お兄さんは全力で俺を引き剥がして全力疾走で逃げる。

「はあ、はあ、はあ、仔那珂すまない。その男は男性以外には無害だから先に帰らしてもらおう。早く帰ってくるように」

「……………」

黙って頷く仔那珂。

「ああ、お兄さーん」

甘い声を出して手を伸ばす俺。その手はお兄さんを掴むことは無かった。正直掴みたくもなかった。

「仔那珂の兄討伐完了!」

そして俺は笑いながら仔那珂に親指を立てる。

すると仔那珂はB Lゲームを落としたまま俺に抱きついてきた。

「え?」

それは軽いハグではなく、締め付けられるような強いハグ。

「お、おい……………仔那珂?」

両腕を巻きつけられて抱かれている俺は、後ろに手を回すことも出来ない。回しても回す勇気は無いのかもしれないが。

「ありがとう、和磨。あたし本当は怖かった。もしあのまま和磨が庇ってくれなかったらあたしはあたしを保ち続けられなかった。ありがとう」

「お、おう……………任せとけ」

……………痛いぐらいに締め付けられている俺は彼女の重い思いもまた感じ取ることが出来た。

「ごめん、あの時あたし本当のこと言えなくて……………」

彼女の涙で俺の胸が湿って涙は止めどなく溢れ出てくる。

「……………」

彼女の涙を見てはいけなれないと思いい紅に染まった空を眺める俺。
紅の空を眺めている間に俺は思う。

あれ？ これ死亡フラグじゃないの？ 大体主人公に幸せが訪れた時に来るものって死だよな。ははは、笑えねえ。

背筋がぞくつと震えて俺は身震いする。

「それよりもさ、このゲーム拾おう」

まだお兄さん以外は見ていないけど他の人がここを通るだろう。その時にBLゲームを野晒しにしたままだと白眼視されかねない。

「ああ、うん」

彼女は俺から離れる。目が充血していた。そして少し残念な気持ちになりつつも俺は早急にゲームやグッズを袋に入れていく。

ゲームを半分入れた頃に彼女が口を開く。

「和磨、さっきの言葉本当じゃないよね？」

「さっきの言葉？」

「あの……お兄さんがタイプって言葉」

「……な訳ねえだろ。俺は女が好きだ」

少々気持ち悪さを覚える。確かにあの人はモテそうな顔つきだが俺は同性愛者ではない。

質問の解に彼女は安心したように小さく口にした。

「良かった……」

「？」

疑問符を浮かべながらも俺は言及せずにゲームを拾う。

「そう言えばさ、仔那珂俺に何か用事があったのか？」

唯への秋葉紹介が終わって、俺を追いかけて来た。結局何の用だったのだろうか？

すると仔那珂は手をポンと叩く。

「ああ、そうだった！ 当初の目的を忘れるところだった」

「当初の目的？」

当初の目的が試着室関係でないことを願うよ。

俺が顔に出さずに覚悟をしていると、リボンの付いた赤い箱を差

しだされる。

「ん？ 何だ、これ？」

不思議そうに呟く俺。

「これはあの……家に帰ってから見よ！」

「家に帰ってから？ ここで見たらいけないのか」

危険物？ でもそれを俺に渡すわけもないか……。

「うん、ダメ。でもあたしが見えなくなってからだったらいいわよ」

「？」

不思議そうな顔を続けると仔那珂は携帯電話を右耳に当て慌てながら口にする。

「ああ、お兄ちゃんから電話来た！ じゃあバイバイ！ ああ、そのBLEGGZの袋はしばらく預けた！ 頼むね。和磨」

そして慌てるように去って行く。

……いつもと様子が違う仔那珂に手を振る俺。

「さつき着信音鳴って無かったよな？ マナーモードにでもしていたのか？」

俺はもやもやを感じながらも、袋を左手に赤い箱を右手に持ち帰宅する。

玄関前、俺は彼女の言葉を思い出す。

「確か仔那珂が見えなくなったらこの箱を開けても良いって言うていたよな。それなら今開けるか」

赤い箱の袋を丁寧に剥がす。そして中身を見た時俺は眼を細めた。そしてその開けた箱を持ったまま家の扉を開ける。

パンツ！ パパンツ！ パパンツ！

扉を開けた瞬間に鳴る破裂音。そして頭に降りかかるカラフルの紙テープ。しかし、不愉快では無い。それは玄関前で見た赤い箱の

中身が教えてくれた。

「……誕生日おめでとう……」

玄関の靴前で四人がクラッカーを持って一斉に俺の誕生日を祝ってくれた。

四人の行いに俺は肩を竦め笑い「あのさ、俺もう高校生だよ」と口にする。

厳格な親父が腕を組み低音の声で喋る。

「何歳になつても誕生日は華やかにするものだ」

次にお母さんが目を細めて肩を叩く。

「大きくなつたわね。和君」

次に弟と姉が同時に祝ってくれる。

「兄ちゃん、おめでとう」「おめでとう。また一つ大きくなつたわね、和磨」

「はははっ、皆ありがとう」

俺が今持っている右手の赤い箱に入っていたものは二つ。メイド喫茶らぶ、メイの食券五千円分。そしてもう一つは仔那珂と御月の手書きのバースデーカード。

内容はまだ読んでいない。いや、恥ずかしくて上手く読めないかもしれない。

二人に渡された大事な赤い箱を持ち、家族を見て、俺は笑つてもう一度口にする。

「ありがとう」

八月十三日、蓮見和磨は十七歳になった。そして俺はまた一つ大きくなった。

俺とオタクと未来地図

「幼女戦士ミルクちゃんが一番」

「何言っているの、御月。やっぱり愛輝くんの魅力には勝てないわよ」

「御月さん、仔那珂さん、私はやっぱりコスプレに魅力を感じますよ」

「唯、今はフィギュアの話をしているの！」

「そうそう」

「むう、でもコスプレの楽しさには勝てません。そうですね、蓮見さん？」

「俺に振るな」

五人はいつもの調子で会話を弾ませる。店内に響き渡る声の大きさで。

九月十一日午後十一時十五分、俺達はいつものようにいつものメンバーで秋葉原に訪れている。会話も俺には到底理解出来ない話の連続だ。しかし、気分は悪くない。

「でもコスプレは不滅ですよ」

「ホント、お前萌文化が好きになったよな。コスプレイヤーになりやがって」

今日の唯は堂々とゴスロリ服で店内にいる。

でもこいつは成長したと思う。お馴染みの店らぶ　メイでもしっかり仕事をこなしている。俺達とも友達のように接している。まあ彼女は口を酸っぱくお話し期間と言ってくる訳だが。そして相変わらず敬語は変わらない。

「そう言えば蓮見さん、女装最高に似合っていましたよね？　もう

一度女装して下さいよ。私太鼓判です」

「唯、俺はもう一生女装しないぞ」

「えー、つまらないです」

唯がつまらなさそうに嘆くが、勿論俺は光河のように女装趣味を
持つてはいない。

「和磨、和磨、あんたも見なさいよ。この愛輝くんのフィギュア。
最高に可愛いでしょー、本当に欲しいんだけど。今すぐレジに持っ
ていこうかな」

仔那珂は前も好きと言っていた愛輝とやらのフィギュアに釘づけ
になっている。

「別に良いけど……それ買ったら他の物買えなくなるぞ」

「うーん、そうだけ……」

そう言われ仔那珂は愛輝のフィギュアと他の物を比較する。

「うーん、これとこれでは……」

仔那珂も変わったよな。BLへの愛情は会った時よりも激しくな
っている。まあその変は流しておこう。それよりも俺が嬉しい変化
は別の所にある。それは仔那珂が前以上に優しく笑ってくれること
になった点。学校でも前以上に傲慢な姿勢ではなく、柔和になった
気がする。

「よしっ、やっぱり愛輝くんのフィギュアを買う。分かった和磨？」

「ああ」

別に俺の承諾はいらないぞ。仔那珂。

余談だが、まだ俺は仔那珂の兄にホモ野郎の烙印が押されている。
それにあのお兄さん仔那珂が俺と遊ぶ度に「襲われていないか？」
「怪我をしていないか？」とやたら気にするらしい。ホントに余談
です。ありがとうございます。

「仔那ちゃんが買うなら私も買おうかな。ミルクちゃんのフィギュ
ア」

「うん、それが良い！　それが良い！」

「うん！　じゃあ私も買うよ。このミルクちゃんフィギュア。すい
ませーん、フィギュア買いたいですけど」

『ああ、はい。少々お待ち下さい』

仔那珂と御月が店員さんに頼んでフィギュアケースからフィギュアを出してもらう。秋葉原では高価な物や価値があるフィギュアはケースに入れられている。

二人も変わったけど御月も結構変わったよな。前よりずっと積極的になったよな。仔那珂のことも前のさん付けとは違って仔那ちゃんと呼んでいる。夏休み明けの学校でも俺達以外の友達が出来たとのメールも送られた。本当に御月は変わったよ。

俺が三人の成長に感心していると仔那珂は驚くことを口にした。「和磨つて変わったわよね。あたしは全然変わっていないのに。取り残された気分」

それに同意する御月。

「私もそれ思ってたよ。和磨くん前よりずっとオタクに対して柔和になっただ」

仔那珂が変わっていないと思っっている点も驚きだが、もっと驚きなのは自分が変わったという点。いつも通り接していると思うんだが。

「俺そんなに変わったかな？」

自分自身に指をさして聞く。すると二人は大きく頷いた。さも当然のように。

「変わっているよ。だって前まではオタクを白い目で見ていたでしょ。分かっているいかも知れないけど顔に出ているんだよ」

「御月の言うとおりよ、和磨。もしかしてあんた何かに目覚めたの？」

ニヤニヤしながら仔那珂が俺に問う。

「別に何も目覚めてない」

「正直に言っているのよ」

仔那珂はまだニヤニヤしている。それも冷やかしの念が籠っている笑い。

「だから目覚めていないって」

「つまらないわね」

……… 全く、何を考えているんだ。仔那珂は。

でも今思うと俺は変わっているのかもしれない。昔はオタクと呼ばれる人間を毛嫌いして見るだけで避けていた。でも仔那珂と御月に出会ってからオタクにも良い人がいるんだなって知った。それから唯と出会ってまた友達が増えて毎日がより楽しくなった。

俺はいつしか心を開いていた。

昔嫌いだったオタクに。

そして嫌いだったオタクは好きに変わった。

それは大きな違い。好きと嫌いでは百八十度変わってくる。

「そろそろ腹も減ってきたし、らぶ、メイにでも行くか」

三人のオタクに話しかける非オタク。

「和磨、珍しくタイミングが良いわね。あたしもお腹空いていたの

よ

「私も」

「恥ずかしながら私も同意です」

「よし、じゃあ行くか」

そして三人は同意する。

三人と過ごして楽しい日々は変わらない。しかし、俺の根本も変わることは無い。

俺は非オタクであってオタクではない。

でも俺は少しタイプが違う非オタク。オタク好きの非オタク。

しかし、そんな矛盾など無関係で俺は沸々と満足感が溜まってい

く。
だから非オタクの俺は気分よく店を出て叫んだ。

「あー、秋葉原最高!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8407w/>

僕はオタクでない

2011年9月23日03時30分発行